

天地有情

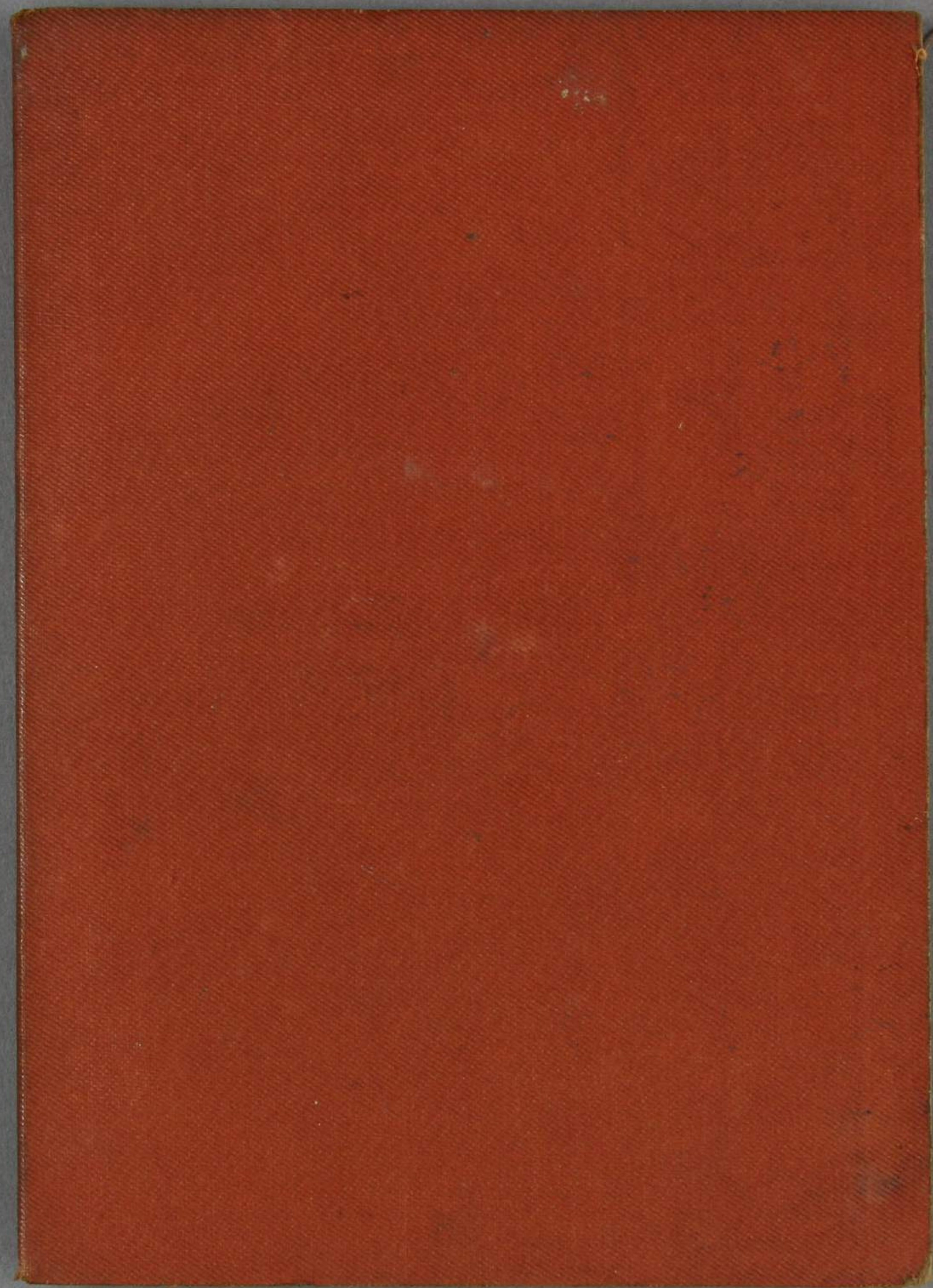
本間文庫

文庫 14

D 207











文學士王井晚翠著

天地有情

東京博文館藏版



新刊

藤村

藤村の
新刊

本邦博士新刊の
新刊

昭和十六年三月

土井 院 筆

序

「或は人を天上に揚げ或は天を此土に下す」と
 詩の理想は即是也。詩は閑人の嚙語に非ず、詩
 は彫虫篆刻の末技に非ず。既往數百年間國詩
 の經歷に關しては余將た何をか曰はん。思ふ
 に所謂新躰詩の世に出で、より僅に十餘年、
 今日其穉態笑ふべきは自然の數なり。然れど
 も歲月遷り文運進まば其不完之を將來に必
 すべからず。詩は國民の精髓なり、大國民にし
 て大詩篇なきもの未だ之あらず。本邦の前途

序

(一)

をして多望ならしめば、本邦詩界の前途亦多望ならずんばならず。本書收むる所余が新舊の作四十餘篇素より一として詩の名稱を享受するに足るものあらず。只一片の微衷、國詩の發達に關して織芥の貢資たるを得ば幸のみ。著者不敏と雖とも自ら僭して詩人と爲すの愚を學ぶものに非ず。

東京に於て

明治三十二年三月

土井 林吉

例言

一 本書に収めたる諸篇の大多數は嘗て「帝國文學」及び「反省雜誌」に掲載せるもの、今帝國文學會及び反省雜誌社の許諾に因りて茲に轉載するを得たり、謹んで兩社に謝す。

一、詩を以て遊戯と爲し閑文字と爲し彫虫篆刻の末技と爲すは古來の漸なり、是弊敗れずんば眞詩決して起らじ。一般讀者の詩に對する根本思想を刷新するは今日國詩發達の要素なるを信ず。附録は泰西諸大家の詩論若くは詩人論なり。素是諸書漫讀の際偶然抄譯し置けるもの、故に

精を窮め理を竭せるには非ずと雖も今日の讀
 詩界に小補なくんばあらず。敢て切に江湖の精
 讀を請ふ。

天地有情目次

(一)	次	目
希望	……	一
雲の歌	……	三
星と花	……	九
鶯	……	一〇
萬有と詩人	……	二三
哀歌	……	二六
海棠	……	三二
無題	……	三三
詩人	……	三三
夕の思	……	三五
岸邊の櫻	……	四九
花一枝	……	五一
夢	……	五三
夏の夜	……	五五
光	……	五六
月と戀	……	七三
夕の星	……	七三
墓上の花	……	七四
暗と眠	……	七六
廣瀬川	……	七六
籠鳥感	……	八〇
馬前の夢	……	八二

花と星……………	九	造化妙工……………	一三七
浮世の戀……………	一〇一	静夜吟……………	一三五
登高……………	一〇五	哀樂……………	一三七
夜……………	一〇七	星落秋風五丈原…	一三八
小兒……………	一〇八	夕の磯……………	一六九
赤壁圖に題す…	一一一	暮鐘……………	一七〇
夏の河……………	一一二	附 録	
青葉城……………	一一四	カトライル……………	一八三
別の袖に……………	一一五	セレイ……………	一八九
人の世……………	一二六	ジョーシ、サン…	一九三
紅葉青山水急流…	一二七	エマルソン……………	一九三
枯柳……………	一二六	ユイゴ……………	一九九

天地有情

土井晚翠 著

希望

沖の汐風吹きあれて
 白波いたくほゆるとき、
 夕月波にしづむとき、
 黒暗よもを襲ふとき、
 空のあなたにわが舟を
 導く星の光あり。

ながき我世の夢さめて

心こころのなやみ終るとき、
 罪つみのほだしの解とくるとき、
 墓たまのあかたに我わが魂たまを
 導みびく神かみの御み聲こゑあり。
 嘆なげき、わづらひ、くるしみの
 海うみにいのちの舟ふねうけて
 夢ゆめにも泣なくか塵ちりの子こよ、
 浮う世よの波なみの仇あだ騒さわき
 雨あめ風かぜいかにあらぶとも
 忍しのべ、とこよの花はなにほふ
 港みなと入い江えの春はる告つげて、

雲の歌

流ながるゝ川がはに言こと葉はあり、
 燃もゆる焔ほに思おも想おもあり、
 空そら行いく雲くもに啓ひら示かあり、
 夜よ半なの嵐あらしに諫いさ誠まことあり、
 人ひとの心こころに希のぞ望みあり。
 ゆふべは崑崙こんろんの谷やの底そこ
 けさは芙蓉ふようの峯たかねの上うへ
 萬里ばんりの鵬ほうの行い末すえも
 馳かけり窮きゆうめむ路ち遠とほみ
 無な限げんのあらしわが翼よく
 空そらの大おほうみわが旅たび路ぢ。

空の大海星のさと
緑をこらすたいなかに
懸かる微塵の影ひとつ
見るく湧きて幾千里
あらしを孕み風を帯び
光を掩ふてかけり行く。
いかづち怒り風狂ひ
山河もよどみ震ふとき
天渾高く傾けて
下界に注ぐ雨の脚
やめば名残の空遠く
泛ぶ七いろ虹のはし。

曙あけぼのの紫こむらさき
澄みてきらめく明星の
光微かに眠るとき
覺むる朝日を待ちわびつ
やがて熾ほの羽はね添へて
中より高くのぼし行く。
しづけき夜半の大空に
ほのめき出づる月の姫
下界の花を慕ひつゝ
半ば耻らふ面影は
ために掩ほはむわが情
輕羅の袖と身を替て。

照りて萬朶の花霞
 花にも勝る身の粧
 あるは歸鳥の影呑みて
 ゆふべ奇峯の夏の空
 海原遙か泛びては
 紛ふ白帆の影寒く。

織ればわが文春の波
 染むれば巧み秋の野邊
 羽蓋凝りて玉帝の
 御駕みくらま空に駐るべく
 錦旗かへりて天上の
 御遊みあそびの列の動くべく。

跡こそ替れ替りなき
 自然の工みわが匂ひ
 嶺たかねに驟あまく夕暮は
 天女羅綾の舞ころも
 断片風に流れては
 われ晴空の孤月輪。

影縹緲せうせうの空遠く
 ゆふべいごよふわが姿
 無心のあどは有情の
 誰が高樓たかろうの眺めうや
 珠簾かすかに洩れいでし
 咽ぶ妻琴ぬも細く。

千仞高ききり崖きしの
 嶺に聳たつ松一本
 緑の枝に寄りかゝり
 風の袂を振ふとき
 鳴く音ねすみて來るたづに
 貸さむ今宵の夢の宿。

岸の柳ともろとも
 水面に影を宿すとき
 江山遠き一竿かんの
 不文のひじり何と見む
 思は清く身は軽く
 自在はわれに似たる身の。

自然の姿とこしへに
 われは昨日の我ながら
 嗚呼 函 關 の 紫 も
 昔のあとろ遙かなる、
 帝 郷 遠 し 影 白 く
 泛べば慕ふ友や誰れ。

星と花

同じ「自然」のおん母の
 御手にそだちし姉と妹いも
 み空の花を星といひ
 わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど
 にほひは同じ星と花
 笑みと光を宵々に
 替はすもやさし花と星
 さればあけぼの曙雲白く
 御空の花のしぼむとき
 見よ白露のひとしづく
 わが世の星に涙あり。

鶯

紫にほふ横雲の
 露や染めけむ花すみれ

花に戯るゝ蜂蝶の
 戀か恨かうつゝ世の
 はかなき春をよそにして
 大空のぼる鶯一羽
 あらしは寒し道さびし。

春の姿はたへなれど
 花の薫りはにほへれど
 其春よりも美はしく
 其花よりもかんばしき
 雲井のをちをめぐしつゝ
 大空高く鶯一羽
 あらしはさびし道かたし。

背には無限の天てんを負ひ
緑雲はねにつんざきて
飛び行くはてはいつくや
望のあした持ち來る
高き薫りのあとよめて
大空めぐる鷺一羽
あらしはつらし道すぢし。

嗚呼コトカサス峯高く
千重の叢雲むらだちて
下界のひらきやむところ
天上の火を奪ひ來し
彼のたぐひか青ぐもの

大空翔くる鷺一羽
あらしははげし道遠し。

萬有と詩人

*Atque omne immensum peragravit mente
animoque. Lucretius.*

「渾沌」よさし窮りて
時「永劫」のふところを
出でしわが世のあさぼらけ
かざしににほふ明星の
光に琴を震はしめて
詩人よ君は歌ひしか。

流るゝ光りしづむ影
 過ぎし幾世の春秋
 巖は移り山は去り
 淵も幾たび替りけむ
 おほあめつちの美はしき
 たくみは今もむかしにて。

あゝわだつみの波の花
 銀蛇の飛ぶに似たるかな
 仰げば空に虹高し
 虹にも酔はぬわがこゝろ
 波にもにぶきわがこゝろ
 たのむは獨り君が歌。

生ける燐のバプテスマ
 浮世の塵を焼き掃ひ
 雲を震はせ風に呼び
 光に暗に伴ひて
 大空遠く翔けりくる
 詩神の歌を君聞くや。

あさ日の光りゆふ光り
 かれとこれとの染め替ふる
 たくみもよしや天雲の
 輕羅のころも花ごろも
 曳くやもすその紅に
 詩神の影を君見るや。

「泉のほとり森のかげ
 光てりそふ(一)岡のみか
 あしたの風の吹くところ
 ゆふべの雲のゐるところ
 露のしづくのふるところ
 いづくか歌のなからめや。

流るゝ水のゆくところ
 きらめく星のてるところ
 緑の草の生ふところ
 鷺の翼を振るところ
 獅子のあらしに呼ぶところ
 いづくか歌のなからめや。

春は吉野のあさぼらけ
 こむる霞のくれなゐも
 遠目は紛ふ花の峯
 夏はライソンの夕まぐれ
 流は遠く水清く
 映るも岸の深みどり。

汨羅の淵のさいれなみ
 巫山の雲は消はぬれど
 猶揺落の秋の聲
 潮も氷る北洋の
 巖を照らすくれなゐは
 光しづまぬ夜半の日か。

路に斃れしカラパンの
 枯骨砕けて塵となり
 魂^{たま} 啾々の恨さへ
 あらしにまじる大砂漠
 もの皆滅ぶ空却の
 面影君はこゝに見む。

黒雲高くおほ空の
 照る日の影を呑みけして
 紅蓮の爛すさまじく
 巖も熔くる火のみ山
 あめつちわかぬ渾沌の
 おもかげ君はこゝに見む。

まぼろし追うてくたびれて
 しばし野末の假のやど
 結ぶや君よ何の夢
 さむれば赤したなこゝろ
 あたりの風を匂はして
 笑むはやさしの花ばらか。

涙にあまる^(二)思とは
 歌ふをきゝぬ野路の花、
 荒磯蔭のうつせ貝
 聲なきものを何人か
 海のしらべをこゝろぬを
 其一片に聞^(三)きにけむ。

たかねの崖に花にほひ
 情波の淵に歌は湧く、
 無象を聲に替ふるてふ
 君が心耳しんのきくところ
 空のいかづち何をつげ
 夜半のこがらし何を説く。

夜半のこがらし何を説く、
 「眠」の如く「死」の如く
 やさしき鳩はなの羽たゆく
 ゆふべの空に下くだるごとく
 詩神の魂たまの降り来て
 君が心を見たとすとき。

夜の薫りの高うして
 天地しづかに夢に入る
 うちに聲なく言葉なく
 またしく窓のもしびに
 風の姿を眺めては
 思はいかに君が身の。

心の窓も押しあけて
 眺むる空に流れくる
 星の行衛はいづくや
 清きアポンの(四)岸のへか
 咲くタスカンの(五)花の野か
 それライマア(六)の森蔭か。

北斗は遠し影高し
 望の光り愛の色
 かれにもしるき参(七)宿の
 もなかにひかりかゝりやきて
 (かたどる影は眞善美)
 三の星こそ並ぶなれ。

坤輿一球透き通り
 仰ぎて上に見るがごと
 下にも光る千せん萬まんの
 星の宿りを眺め得ば
 下界の名さへ空しくて
 我世いみじと知るべきを。

まことの光りまことの美
 狭霧に蔽はれどざされて
 暗にさまよふわがこゝろ
 たのむは獨り君が歌
 紫蘭の薫り百合花の色
 爲めに咲かなん君が歌。

しらべも高くねも高く
 あらきあらしを和げて
 微妙の樂に替ふるてふ
 君か玉琴かきならし
 涙のうちにはほゝゑみて
 暗のうちにもかゝりやきて――

かのオルビスのなすところ
 陰府に繋がる魂を解き
 かのピタゴルの説くところ
 御空に星の樂を聞き
 かのプラトンの見るところ
 高き理想の夢に酔へ。

(註) 失樂園第三卷

- (一) ナルツナルス
- (二) ロセツテ
- (三) セークスピア
- (四) ダンテ
- (五) ムーテ
- (六)

(七) オライオンの星宿

はるのよ

あるじはたそやしらうめの
 かをりにむせぶはるのよは
 おぼろのつきをたよりにて
 しのびきよけむつまじとか。

そのわくらはのてすさびに
 すいろにゑへるひとごころ
 かすかにもれしどもしびに

はなのすがたはてりしとか。

たをりははてむはなのねだ

なれしやどりのとりなかむ

れぼろのつきのうらみより

そのよくだちぬはるのあめ。

ことはむなしくねをたにて。

いまはたしのぶかれひとり

あゝそのよはのうめがかを

あゝそのよはのつきかげを。

哀 歌

同じ昨日の深翠り

廣瀬の流替らねど

もとの水にはあらずかし

汀の櫻花散りて

にほひゆかしの藤ごろも

寫せし水は今いづこ。

心ごゝろの春去りて

色ことくく褪めはてつ

夕波寒く風たてば

行衛や迷ふ花の魂

名残の薫りいつしかに

水面遠く消えて行く。

恨みを吹くや年ごとの
瑞鳳山の春の風
をのへの霞くれなゐの
色になろろふ花ごろも
とめし薫りのはかなさは
何に忍びむ夕まぐれ。

暮山一朶の春の雲
緑の鬢を拂ひつゝ
落つる小櫛に觸る袖も
ゆかしゆかりの濃紫
羅綺にも堪へぬ柳腰の
枝垂は同じ花の緑

花散りはてし夕空を
仰げば星も涙なり。

池のさゝ波空の虹
いみじは脆き世の道を
われはた泣かむ花の蔭
其花掃ふ夕風に
蝴蝶の宿を音つれて
問はん「昨日の夢いかに」

春を誘ふて蜂蝶の
空のあなたに去るがごと
玉釵碎けて星落ちて

あはれ芳魂いまいづこ
残るは枯れし花の枝
盡きぬは恨み春の雨。

盡きぬは恨み春の雨
ともしび暗きさよ中の
夢のたしちをいかにせむ
ありし昨日の面影に
替はらぬ笑みも含ませて
名におふ花の一枝は
嗚呼その細き玉の手に。

海 棠

盛りいみじき海棠に、
灑ぐも重し春の雨
花の恨か喜か
問はんとすれど露もだし
聞かんとすれど花いはず。

夕しづかに風吹きて
名残の露は拂はれぬ
風の情なさけか嫉みにか
問はんとすれど露もだし
聞かんとすれど花いはず。

無 題

光り玉しく露満ちて
 百合花も蓄さう薇びも蘭らんも
 馨りあふるゝ園あらば
 君が踏み行く路とせむ。
 流るゝ花を誘ひては
 海原遠く香をはこぶ
 清き野中の川あらば
 君がかゞみの水とせむ。
 夕よの空に現はれて
 微笑えめる光に塵の世を

詩 人

慰めてらす星あらば
 君がかざしの珠とせむ。
 清くたふとく汚なく
 戀も涙も憐みも
 みつるやさしの胸あらば
 君が心の宿とせむ。
 詩人よ君を譬ふれば
 戀に酔ひぬるをどめどか
 あらしのうちに樂がくを聞き
 あら野のうちに花を見る。

詩人よ君を譬ふれば
世の罪しらぬをさなごか
口にはは神の聲ひしき
目にはみそらの夢やどる。

詩人よ君を譬ふれば
八重の汐路の海原か
おもてにあるゝあらしあり
底にひそめるまたまあり。

詩人よ君を譬ふれば
雲に聳ゆる火の山か
星は額にかゝやきて

焰の波を胸に湧く。

詩人よ君を譬ふれば
光すゝしき夕月か
身を天上にとめ置きて
影を下界の塵に寄す。

夕の思ひ

“Où va l' esprit dans l'homme ? Où va l' homme sur terre ?
Seigneur ! Seigneur ! où va la terre dans le ciel ?”

—Hugo : Les Feuilles d' Automne.

“O life as futile, then, as frail !

O for thy voice to soothe and bless !

“What hope of answer, or redress?
Behind the veil! behind the veil!”

—Tennyson: In Memoriam.

(一)

思入日を先きだてゝ
たそがれ近き大空に
うかびいごよふ雲のむれ
暮行くけふの名残とて
見るめまばゆきあやいろを
染むるは何のわざならむ。

あるは幾重の空のよそ
あるは幾重の嶺のうへ

かるく流るゝくれなゐは
セラフ、ケラブの旗を見せ
ゆるく緩びくむらさきは
あまつをとめの裾や曳く。

夕くの空の上
替るもゝちの面影を
替らぬ愛に眺むれば
たゞ聯想の端はしとなる
雲よ自在のはねのして
いつくのばてに翔けり行く。

あゝ夕雲のかけりゆく

空のあなた予なつかしき
 心の渴きとゞむべき
 そこに生^{いのち}命の川あらむ
 真理のかどを開くべき
 そこに秘^{ひみつ}密の鍵あらむ。

嗚呼夕雲のはねのうへ
 たれか「涙の谷」棄てし
 荒鷺翔けり風迷ふ
 空のあなたに飛行かむ
 浮世の暗にしられざる
 光はそこにてるべきに。

花より花にむれとびて
 蜜を集むる蜂のごと
 星より星に光をと
 飛^(一)行く魂を眺めけむ
 詩人のくしきまぼろしを
 たれかうつゝに返すらむ。

(二)

消えしエデンの花園の
 おもわは今も忘れず
 ほす味にがきさかづきの
 底なる濃^{たぎ}に酔はんとて
 塵の浮世に塵の身は
 かくもいつまで残るらむ。

涙の谷にさまよひて
 ぬぬ夜の夢に驚けば
 こゝにバイロン血に泣きて
 「死と疑の子」となのり
 こゝにシルレル聲あげて
 「理想は消ゆ」と叫ぶなり。

ア^(二)ポンの流しづかにて
 すゝしく月を宿せども
 見^(三)ぬそこひに波むせび
 グ^(三)ラスメヤアの^(三)水面にも

うつる此世の影見れば
 た^(四)と海^(四)神のなつかしや。

されば^(五)ラインの岸遠く
 思^(五)をこめて人は去り
 ぜ^(六)子^(六)アの夏の夕暮は
 よ^(六)その^(六)恨の歌を添へ
 深^(七)き^(七)嘆^(七)は^(七)子^(七)イ^(七)プ^(七)ルの
 波^(七)も^(七)洗^(七)ひ^(七)や^(七)得^(七)ざ^(七)り^(七)け^(七)む。

波に照れとて空の月
 花に舞へとて春の蝶

「自然」のわざは妙ながら
世に苦めと塵の身を
暗に迷へと玉の緒を
つくる心のしりがたや。

かゝやく星に空かざり
玉しく露に地を粧ふ
神にたづねむいかなれば
なまじの絆人の子の
心に智慧の願あり
胸に悟の望ある。

(三) 荒れのみまさる人の世に

せめては匂ふ戀の花
脆きはたれの谷ならむ
星の眸まなざし月の眉
たゞ思出の種として
いづく消行くまぼろしを。

母の乳房にもたれつゝ
宿すもゆかし春の夢
見なば魔王もえみぬべき
稚子の眠りもひとゝきや
やがて寄來ん世のあらし
つらきあらしのさますらむ。

つらきあらしを譬ふれば
 陰府なる門のきしかも
 脆き、弱きをにへとして
 いけるをきほふ世々の聲
 うちに恨の叫あり
 うちに憂の涙あり。

民のもゝちの骨枯れて
 ひどりのいさを成ると説く
 それにもまして痛はしき
 個人ひとの嘆と悲と
 涙と血とに買はれたる
 社会しやかいの榮はなはたがためぞ。

時劫の潮とこしへに
 寄するあら波返る波
 浮きて沈みて末つひは
 たいうたかたのよゝのあと
 いづれの時かいつの世か
 亂れ騒きのなかりけむ。

世界の富を集めたる
 ローマの榮華夢と消え
 こがね鑊くわくばめ玉しきし
 ニネブ、バビロン野と荒れて
 砂上につきしバベル塔
 今はた何を残すらむ。

嗚呼 人榮へ 人沈み
國また 起り 國亡び
かくて 廻りて 極みなく
かくて 流れては てもなく
時よ 浮世よ いつくより
時よ 浮世よ いつちゆく。

(四)

ひとり 思にかき くれて
たゞず 影も みる 雲も
消えて むなしき 夕まぐれ
神の 慈愛の まなじり 加
みどり 澄みゆく 大空に

はやてりそむる星のかげ。

あゝなつかしの星の影
夢と 過行く 人の世に
猶「永劫」のあと 見せて
あめとつちとの 割れけむ
むかしのまゝにどこしへに
わかき光に 匂ふかな。

其 永劫の 面影を
仰けば 我に 涙あり
高くたふとく 限りなき
靈のいぶきに 扇がれて

空のあなたにかげとむる
「望」のあとに喘ぎつゝ。

天には光地には暗
あひにさまよふ我思ひ
浮世の憂を吹寄せて
あらし叫びぬ「惱よ」と
神の光榮をほのみせて
星さゝやぎぬ「望よ」と。

(注) (一) ダンテ「神曲」中「天國篇」を見よ。

(二) セークスピアの故郷の川。

(三) ナルヅウナルス住所の傍にありし湖。

- (四) プロテアス及びトライトンを指す、有名なる。“The World is too much for us”の歌を見よ。
- (五) チャイルデ、ハロード「第三篇第五十章及其續きを見よ。
- (六) ラマルティン此處にバイロンを見後日當時を追想して「人間」を題する沈痛悲壯の詩を詠す
- (七) センイの“Stanzas written in dejection, near Naples.”



岸邊の櫻

春 静かなる里川の
 岸のへ匂ふ花櫻
 水面の影にあこがれて
 涙灑げる幾たびか。
 れのが影とも花知らず
 光のどけき朝日子に
 姿凝らして水面を
 あゝ幾度か眺めけむ。
 影ものいはじ水去りて

花一枝

いつしか老ゆる花の面
 うつらふ色を眺めては
 思やいかにか夕まぐれ。
 春も空しく暮去れば
 梢離れてあゝ花よ
 水面の影と逢ひながら
 行くゑはいつこ未遠く。
 ラインの岸に花摘みて
 別れし友に贈りけむ
 詩人を學びわれもまた

君に一枝の夕ざくら。

あしたの柳露にさめ

ゆふべの櫻風に酔ふ

都の春の面影を

せめては忍べとばかりに。

通ふ鐵路も未遠く

都の春は里の冬

玉なす御手に觸れん前

萎み果てむかあゝ花よ。

萎み果てなむ一枝を

空しく棄てむ君ならじ
心の色に染めなして
寢覺の窓にほましめよ。

夏の面影

夢

韓紅の花ごろも

燃ゆる思とたきこめし

蘭麝の名残匂はせて

野薔薇散り浮くいさゝ川

流の水は浅くとも
深し岸邊の岩がぬに
結ぶをとめの夏の夢。

よその高峯の夕霞
何にまがへてたどりけん
羅綾のしとぬ引換へて
今は緑の苔むしろ
水とこしへに流去り
花いつしかと散りぬれば
夢か昨日の春の世も。
のぼる朝日に照りそひて

色なき露も色にほふ
眺めまばゆきあさぼらけ
若葉のみどり夏深き
梢はなるゝもゝ鳥は
我世たのしと鳴くものを
さめずやあはれをとめごよ。

鳴くや杜鵑のひと聲に
五月雨いつかはれ行けば
ちぎれくの雲間より
やがてほのめく夏の月
銀輪露に洗はれて

我世すゝしとてゐるものを
さめずや哀れをとめよ。

螢飛びかふ夕まぐれ
すゝ風そよぐ夜半の空
流れ流るゝ谷川の
水の響はたえぬども
水の行くゑは替れども
覺めずやあはれなが胸に
燃ゆる思の夏の夢。

夏 夜

静けき夏の夜半の空

遠き蛙の歌聽けば
無聲にまさるさびなれや
眠を誘ふ水の音
心しづかに流るれど
夕月山に落ち行けば
影を涵さんよしもなし。

星夜の空の薄光り
心を遠く誘ひつゝ
すゝしくそよぐ風のぬは
神のかなづる玉琴に
觸れてやひゞく天の樂、
昨日の夢と悲みし

浮世の春は替はれども
見ずやとこよの春の花
散らでしぼまで大空の
星のあなたにほゝゑむを。

光

“Hail, holy Light, offspring of Heaven, First-born
Or of the Eternal coeternal beam !”

—Milton.

くしき天地の靈となり
我世にありて道となり
心にありて智慧となり

迷を破り暗を逐ひ
望をねこし愛を布く
光仰ぐもたふとしや。

清くいみじく比なく
ねほ空高く星に照り
下かんばしく花に笑み
虹のなほ色ちごのため
西の夕榮老のため
染むる光のたふとしや。

高きは山か山よりも
清きは水か水よりも

露はうるはし露よりも
花はかぐはし花よりも
すぐれてくしき比なき
光仰ぐもたふとしや。

水の初めて湧くがごと
ちこの産聲擧ぐるごと
シオソの琴の震ふごと
天使の空を飛ふがごと
とはに新たにまことなる
光仰ぐもたふとしや。

アルバ、オメガを身に兼ねて
今あり後あり昔あり
妙華花咲く池の岸
シナイ雲湧く峯の上
彌陀もエホバもとしへの
光のうちにほゝるみぬ。

獨り我世に許されし
光のあとを眺むるも
夜は千萬の星の色
あけぼの白く雲われて

明星のまみ閉づるとき
照るもまばゆし旭日影。

縁りしづけき峰の上

いみじくゑめるさま見れば

「神」のうひご「ぞ忍ばるゝ

魔界(二)の旅の終るとき

ふたりの道にあられて

照らすは清き朝の波。

暮は遠やま西の山

「浮世もやすめ」夕光り

くれなる染めて沈むなり

かくや命の消ゆんとき

かくやむくろを抜け出て

魂の他界に去らんとき。

夜の黒幕たれこめて

微かに星のきらめくを

焔の海と誰かしる

光まばゆき照る日影

無限(一)の空の大海の

しづくと誰か見る。

照る日照る日の限なき
 碧りのをちのおほ空は
 光の流れ色の波
 溢れぬ隈もなかるべく
 あらし耀き風てりて
 百重の綾も織りぬべく。

そのおほ空のたゞなかに
 わが想像の見るどころ
 緑は消えて金色の
 光まばゆし天の關
 もゝの寶を鏤めて

鑄なすかどを過ぎ行けば。

空かんばしく花降りて
 行く大水の音のごと
 響くは天の愛の歌
 流るゝ霞くれなゐの
 春どこしへに若うして
 風は優鉢羅の花の香か。

嗚呼美はしのみぼろしよ
 現實のあらしつらければ
 かざしの花の露のごと

脆く碎けて跡もなき
今わが歸る人の世に
夢は空しきものなりき。

兩羽りゅう鏡かみどくあまがける
天馬の鞍に堪へ(四)かねて
下界に落ちし塵(四)の子よ
恨はあはれなれのみか
まぼろし消て力なく
今こそ咽べ我琴も。

こゝの光に暗まじり

こゝのうま酒さけにがし
こゝなる戀に恨あり
こゝなる歌に涙あり
「自然」は常にほゝゑめど
世は長ことしへの春ならず。

花は光に鳥は香に
いざよふ雲は夕づゝに
そよふく風は朝波に
替はすは愛のことのはか
「自然」は常にほゝゑめど
世は長への春ならず。

見よや緑りの川柳
 更けて葉越しに青白く
 片破月の沈むとき
 見よやみそらに影曳きて
 恐ぢ驚ける魂のごと
 流るゝ星の落つるとき。――

夢より淡く「北光」の
 光微かに薄らぎて
 氷の山にかゝるとき
 あるは斗牛の影氷る
 悲き光波のへに
 破船の伴の望むとき。――

夕暗空に聲もなく
 影もわびしく稻妻の
 またゝくひまに消ゆるとき
 誰か憂ひに閉されて
 望む光の淋しさに
 我世の様をたぐへざる。

もゝとせ千歳秋去らば
 樂土は實となるべしや
 人と人との争に
 我世の惱絶えざらば
 花たが爲めの薫りや

星たが爲めの光ぞや。

弱き脆きをしへたぐる

わらびを見るもいつまでか

悟の光暗うして

時の徴候は分かぬども

望めわが友いつまでか

「力」は「正」に逆ふべき。

さればうき世の雲は晴れ

つるぎは銷けて天日の

光と照らんあさぼらけ

人の心に恨なく

邦の間に怒なく

我世の上にあらびなく。

愛と自由と平等の

まことの光かゝやきて

天の王國來るとき

嗚呼其時をまちわぶる

友よもろとも手を引て

薄暗の世をたどらまし。

(一)ミルトン失樂園第三篇

(二)ダンテ淨罪界第一章

(四)ペラロホン

月と戀

(五)「オーロラ、ポレアリス」

寢覺め夜深き窓の外
 しばし雲間を洩れいでし
 静かに忍ぶ影見れば
 月は戀にも似たりけり。
 浮世慕ふて宵々に
 寄する光のかひやなに
 叢雲厚く布き満てば
 戀はあだなり月姫よ。

夕の星

あだなる戀に泣く子らの
 手に育ちけむ花のごと
 色青じろう影やせて
 隠れも行くか雲の外。
 ちぎれくくに雲迷ふ
 夕の空に星ひとつ
 光はいまだ淺けれど
 思深しや天の海。
 嗚呼カルデアに牧びとの
 なれを見しより四千年

光はどはに若うして
世はかくまでに老いしかな。

またしく光露帯びて
今はた泣くか人のため
つかれ、争ひ、わづらひに
我世の幸は遠ければ。

墓上の花

死と悲と恨との
跡を留むる墓の上
美と喜びと命いのちとの
心を示す花一つ。

光、あけぼの、來ん年日、
望の影を彼は見せ
暗、夕まぐれ、過ぎし年、
涙のあとを此は見す。

色ある花の聲や何に
聲なき墓の意味やなに
同じあしたの白露を
彼と此とに落ちしめよ。

憂の墓は人のあと
命の花は神のわざ

同 じ 夕 の 星 影 を
彼 と 此 と に 照 ら し め よ。

「暗」と「眠」

夕 暮 迷 ふ 蝙蝠 蝠 の
羽 音 に そ よ ぐ 川 柳
其 み だ れ 髪 わ か ぬ つ
「暗」と「眠」と つ れ だ ち て
梢 し づ か に 下 だ り け り。
墨 ぞ め ざ ろ も 裾 長 く
「暗」の 歩 み に 音 も な し、
ふ り 蒔 く 露 は 見 ぬ ぬ ども

「眠」の 影 の さ す と こ ろ
人 の ま ぶ た は 重 か り き。

過 ぐ る を 憶 ふ 悲 み に
來 ん 日 を 計 る わ づ ら ひ に
ひ と 日 の わ ざ は 足 る も の を
「暗」よ「眠」よ た づ ね 來 て
休 み を 賜 へ 人 の 子 に。

嗚 呼 罪 あ る も 罪 な き も
喜 ぶ も の も 泣 く も の も
現^{うつ}の 夢 を 逃 れ 來 て
「暗」の こ ろ も を 纏 へ か し

「眠」の露に浸れかし。

星宵の空に聲もなく
よさしは今と佇ずめる
「暗」と「眠」の影ふたつ
あまねき恵み人の世に
たるゝいましのなつかしや。

廣瀬川

都の塵を逃れ来て
今わが歸る故郷の
夕涼しき廣瀬川
野薔薇の薫り消に失せて

昨日の春は跡も無き
岸に無言の身はひとり。

時をも忘れ身も忘れ
心も空に佇ずめば
風は涼しく影冴はて
雲間を渡るゝ夏の月
一輪霞む朧夜の
花の夢いまいつころや。

憂ウレよ思よ一春の
過ぎて跡なき夢のごと
にがき涙もねもほへば

今に無量の味はあり
 浮世を捨てゝれくつきの
 暗にとこしへ眠らんと
 願ひしそれも幸なりき。
 流はゆるし水清し
 樂の、光の、波のまに
 すゞしく澄める夜半の月、
 あゝ自然の心こゝろにて
 胸に思のなかりせば
 樂しかるべき人の世を。

籠鳥の感

嗚呼青春の夢高く
 理想のあとにあこがれて
 若き血汐の躍るとき
 人も自在の翼あり。
 自在の翼また伸びず
 現の籠に囚はれて
 餌に鳴音を搾るとき
 狂ふ叫を誰れか聞く。
 狂ふ叫もしづまりつ
 籠を天地と眺めては
 御空のをちも忘れむ

理想の夢もさめ果てむ。

こゝに囚はれこゝにやむ
あだし命の一時や
うたてうたかたうつゝ世を
我嘆かんや笑はんや。

馬前の夢

Être d'un siècle entier la d'pensée et la vie,
Émousser le poignard, décourager l'envie,
Ébranler, raffermir l'univers incertain,
Aux sinistres clartes de la foudre qui gronde,
Vingt fois contre les dieux jouer le sort du monde,

Quel rêve !!! et ce fut ton destin!

Lamartine : Nouvelles Meditations.

ねほ空涵すわだの原
波間の星は影消えて
天地をこむる暗の色
暗を掠めて夜あらしは
時こそくれど狂ふなる
魔神の叫ものすごや。

やがて降りくる雨の音
雨に答ふる波の音
銀山碎け飛び散りて

暗にもしるき沙烟り
白衣の幽鬼群がりて
よみに迷ふに似たるかな。

風雨ふういよく荒れ行きて
四大のあらび渾沌の
世の有様もまたのあたり、
夜の悩みをいやまして
雷車らい亂るゝ雲のへに
魔炎の光りたれか射る。

嗚呼すさまじの雨の夜
あらしも波も聲あげて

歌ひ弔へはなれ島
至尊すいじんの冠かむいたゞきし
かしらは今はうなだれて
かれにいまはの床にあり。

疵きずに惱みて砂原の
月に悲む荒獅子か
檣かき折れておだつみに
沈しずみ消行く大船か
紅蓮くわんねんの焰はしづまりて
雪ゆきに掩おほはるゝ死火山か。
馴れ來し邦を、とも人を、

隔て、遠き離れじま
都の春の一夢を
磯のあらしにさまさせて
氣は世を蓋ほふますらをは
いまはの床に眠るかな。

名は一代の史をまどめ
身は全歐の權を統べ
嫉むを挫じき仇を撃ち
暗と光のねほ波を
世に注ぎしも二十年、

今はた狂ふ雨の夜

あらしに魂の迷はんと
思ひやかけし神ならで。

十萬の鐵馬(一)アルベラの
あらしを蹴りて驅けし後
三千の精騎(二)ルビコンの
流亂して越へし後
彼に比へんものやたそ
群山遠く下に見て
空に聳ゆるアルプスの
高きは君の名なる哉。

斷頭臺の血を灑ぐ

革命の波推しわけて
 現はれいでしタイタンの
 まばゆき光照らすとき
 「民主自由」の聲いつこ
 渦づく時世の高しほを
 しばし隻手にとゞめけむ
 猛きは君の威なるかな。

そら舞のぼる蛟龍の
 黒雲集め雨を驅り
 風に嘯き呼ぶがごと
 山を震はせ海をほし
 進める君が行先を

拒ぎとゞめしものやたそ。

颶風の翼身に借りて
 征塵高く蹴たつれば
 脆く亂るゝ(三)マメリューク
 奔るを逐ふて呼ぶ聲に
 四千餘年の幽魂は
 覺めぬ巨塔の墓の下。

(四) サノ、ミルナアの嶺高く
 雪満山を埋むれば
 響きは凄しアバランチ
 難きをしのぎ險を越へ

見ねろす大野草青く
馬は肥たり(五)マレンゴウ。

(六)オーステリツの朝風に

同盟軍の旗高し

至尊の指揮に奮立つ

二十餘萬の奥魯軍

君の鋒先向ふとき

散りぬ嵐に葉のごとく。

(七)イェーナ、ワグラム雲暗し

(八)フリードランド風あらし

いかづち落つる砲弾の

渦巻く烟かきわけて

君がかざせる鷲の旗

飛電のつるぎ閃めけば

列王つちに膝つきて

見よもろくの國たみは

震ひよどめり海のごと。

セインの流静かなる

岸の柳の浅みどり

みどりの空に聳立つ

凱旋門は高くとも

君のみいづに比へんや

みかどの還御壽きて

歡呼の聲は雷のごと
パリ満城の春の歌。

花ひと時の香ににほふ
脆きはいづれ世の定め
富もほまれもみいづるも
どはの契りをいかにせむ。
「不能」のもじを笑ひしも
嗚呼君遂に神ならず。

玉樓の春短くて
魚龍淋しき秋の水
花はうらがれ香は消に

ほまれの星も落行けば
君蓋世の勇いづこ
焔は狂ふモスコウ府
吹雪は亂る(九)ポロヂノウ。

フランス國の金笏か
ロムバアデイの鐵冠か
全歐洲の大權か
榮華のはてと今ぞ見る
夕日の影は(十)クレムリン
なれが淋しき塔の上。
名残りの光まばゆくも

雲をつんざき現はれし
ヲイタアローの丘の上、
敗れも何か恨むべき
見ずやかなたの(十一)金御像
語るは敵あかの勝ならで
君がいまはの勇みなり。

光りわたらぬ隈もなき
其常勝の劔折れて
獨り小じまの波枕
夜毎の夢もあかつきの
千鳥の聲にさめし時
君や悟れる「命なり」と。

「悟り」よいづれ「薄命」の
遂に受くべきあだし名か
月日は空にかゝやけど
塵の惱みをしづめ得じ
どはに光の消ゆるとも
盲目めくらは見るを忘れんや。

夕 幾 度 波 の 上
錦をひたし綾を布く
入日の影の消ゆし時
沖より寄する暮の色に
心の暗も打まぜて

君が無量の感にかに。

月日の流れ世のさだめ

返らぬ昔今更に

忍ぶ思の數くは

たゞ大潮しほの湧くがごと

夜の黒幕の垂るゝごと

胸に逼ればくろがぬの

猛き心も亂れずや。

惱む思を静めむと

(謝せよ)歩みの音かろく

今こそ寄すれ死の影は

あはれいまはの床の上

まだしづまらぬ魂の

夢はいつことを驅くるらむ。

生れし里は波のいつこ

なれし都は雲の幾重

離れ小じまの雨の夜に

過ぎにし榮は火のごとく

いまはのあとは灰のごと

其喜も悲も

むくろと共に葬むりて

眠につけや夢もなく。

雨どあらしの樂のねに
 こゝに有象セラの海恨み
 惱める魂を導きて
 かれに無象のかど開く、
 苦む「影」に休みあれ
 別るゝ魂に恵あれ
 罪と惱みを葬りて
 あゝ比なくかんばしき
 ほまれは彼の墓にあれ。

(註)

(一)(二)(三)

(一) アレキサンダー大王大に波斯軍を敗りし地
 (二) ゴールの歸途セイザアの渡りし河
 (三) ビラミッド戦争に敗れし土兵

花と星

ゆふべわが世を見れろして
 星は語りぬ「あゝ花よ

- (四) アルプス山中の峻路、所謂セイント、ベルナードの險、
 (五) 伊太利にあり、塙兵大敗せし戰場
 (六) 塙魯の連合軍こゝに大敗す
 (七) ヲグラムに塙軍敗れ、イエーナに普軍敗る
 (八) 魯軍大敗の地、以上はナポレオンの最も光榮なる戦勝地
 なり
 (九) 征魯軍退陣の途こゝに風雪の難初まる
 (十) モスコウ府内の宮殿、ナポレオンこゝに陣を取る
 (十一) チャータアロウ丘上同盟軍凱勝の紀念として金獅の像を建
 つ

憂のしづくつらからば
とはに喜び盡きせざる
大空高く昇らずや

しほれしおもわ振りあげて
花は問ひけり「あゝ星よ
とはに喜び盡きずてふ
みそらのをちや涙なき」
星はいらへぬ「あらずかし」

「涙あらずば戀あらじ」
花はいなみぬうつむきて
「わが世の憂さもあれや

とはに喜び盡きずとも
戀なき里をなにかせむ」

浮世の戀

ゆふべ思にかきくれて
眺むる空の雲幾重
紅染めし夕榮の
色いたづらに消果てゝ
晝くは何の面影う
流るゝ光沈む影
傾く齡手の中に
嗚呼ひきとめむすべもかな。

佛は説きぬ娑羅双樹
祇園精舎の鐘のねも
その曉に綻びし
別れの袖をいかにせむ
更けてくるしむ待宵の
涙なみだに數添て
さても浮世の戀予憂き
さても我世の戀予濃き。
名残の袖の追風の
行衛いつくと眺むれば
春やむかしの川柳

縁のおぐし今更に
ふけて亂れて絆れては
鏡も何ぞいさゝ川
見ずや踏入る一足に
こゝも移ろふ世の姿。
里飛びたちし鶴の子が
去りて歸らぬ松一株
花なき色は替らぬど
枯れては恨む糸櫻
吹くや淋しきすさまじき
幾代浮世の風のぬに
命の汀眺むれば

寄するも憂しや老の波。

その仇波の寄せぬまに

花のかんばせ星のまみ

燃ゆる思と熱き血と

そのまゝ共に消ゆよかし

願空しきとこしへの

不變の戀よ不死の美よ

詩人の夢をいかにせむ

天使の幸をなにとせむ。

虹の七色空の色

染むるがしばしうたかたを

旭日の光てらすとき
あゝ喜びかまがつみか
幸か恨みか分かぬども
戀よ我世の春の夢
さめなばよみの門口に
「生ける」屍を誘へかし。

登 高

烟は沈み水咽ぶ
五城樓下の夕まぐれ
高きに登り行めば
遠く悲雷の響あり
心の空に吹き通ふ

風の恨に誘はれて
色こそ悼め夕雲の
嶺に歸るもなつかしや。

十年は夢かまぼろしか
時の流は絶にぬども
レズの水は世に湧かず
むかしの思忘れで
今はたこゝにわれ一人
夕日の前に佇めば
染むども見ぬ秋の色に
山々高し水遠し。

夜

あらしを孕む黒雲に
吐かれて出でし夜半の月
よみの光をほの見せて
片破の影ものすこや。

見ぬ翼に「時」飛びて
迷を散らし夢を捲き
街に烟ふるともしびは
暗に疲れて眠り行く。

我世の涙そらの露

合みて星も隠れ行く
心の暗に照らざらば
消ゆよ光の甲斐やなに。

神よ問はなむぬばたまの
「夜」のもすそに包まれて
咽ぶ涙は幾何ぞ
静けき夢は幾何ぞ。

小 兒

くしく妙なるあめつちの
何に譬へむをさなごよ
清きいみじき、美はしき

汝ながこゝろねを面影を。

薫ほるさゆりの花片に
おくあけぼのゝ白露か
緑色こき大空に
照るくれなゐの夕づゝか。

霞の裾に波絶て
静けき春のあさなぎか
雲雀の床と萌ゆいでゝ
野邊をいろどる若草か。
我世の秋の寄するとき

紅にほふかんばせに
愛の光をかいやかす
なれはのどけき春の日か。

我世のあらしあるし時
蕾とまがふ唇に
天女の歌を響かする
汝はそれ生ける音楽か。

人のわびしく老ゆる時
こゝろときめく口づけに
若きいのちを吸はしむる
なれは盡きせぬとよみきか。

人の愁にしづむ時
息柔かくあたゝかく
樂土の風を匂ばする
汝はとこしへの花の香か。

赤壁圖に題す

首陽の巖手に握り
汨羅の水にいと釣らむ
やめよ離騷の一悲曲
造化無盡の藏のうち
我に飛仙の術はあり。

五湖の烟波の蘭の楫

眺めは廣し風清し
きのふの非とは誰れかいふ
松菊庭にあるゝとも
浮世の酒もよからずや。
月江上の風の聲
むかしの修羅のをたけびの
かたみと残る秋の夜や
軽きもうれし一葉の
舟蓬萊にいざさらば。

夏の川

野薔薇にほひて露散りて

夕暮淋しいさゝ川
心の空に消残る
昨日の春を忍ぶれば
いかに恨みむあゝ夏よ。
螢流れて水すみて
夕暮涼しいさゝ川
心の空の浮雲を
拂ふ涼かぜ音さえて
いかに戀せむあゝ夏よ。
漣織りて月照りて
夕暮たのしいさゝ川

流れく／＼て行く水に
秋も近しと眺むれば
いかに惜まむあゝ夏よ。

青葉城

秋はうつろふ樹々の色に
名のみなりけり青葉山
圖南の翼風弱く
恨は永く名は高き
君が城あと今いかに。

並月落ちて宵暗の
星影凄し廣瀬川

恨むか咽ぶ音寒く
川波たちて小夜更けて
秋も流れむ水遠く。

別の袖に

別の袖にふりかゝる
清き涙も乾くらむ
血汐も湧ける喜の
戀もいつしかさめやせむ
物昏移り物替る
わが塵の世の夕まぐれ
仰げば高き大空に
無言の光星ひとつ。

人の世に

梢 離れて雪と散り
母なる土に還り行く
花のこゝろは誰か知る
散りなば散りぬ人の世に。

汀を洗ひ瀬に碎け
流れくゝて海に入る
水のこゝろは誰か知る
去りなば去りぬ人の世に。
きのふくれなる花の面

けふはたかしら霜の色
時のこゝろをたれかしる
移らば移れ人の世に
かたみにしぼる憂なみだ
袖にいつしか乾くらむ
戀の心をたれかしる
替らば替れ人の世に。

紅葉青山水急流

”Er ist dahin, der süsse Glaube

An Wesen die mein Traum gebar,

Der rauhen Wirklichkeit zum Raube

Was einst so schön, so götthoh war."

—Schiller : Die Ideale

桐の一葉をさきだてし
浮世の空に音づれし
秋は深くもなりにけり。
虫のぬほそる秋の野を
染めし昨日の露霜や
萩が花ずりうつろへば
移る錦は夕端山
思入る日に啼く鹿の
紅葉織りなす床の上。

谷間は早く暮行けど
入日の名残しばどめて
にほふをのへの夕紅葉、
花のあるじにあらねども
山ふどころのしら雲に
契るやいかに夜半の宿。
千尋の谷の底深く
流るゝ川のみなもどは
いつく幾重の嶺の雲
玉ちる早瀬浪の音
都の塵に遠ければ
耳を洗はむ人も無く。

雪より白きたれぎぬを
狭山ねろしに拂はして
岸にたゝずむかれやたそ
巫山洛川いにしへの
おもわを見する乙女子は
浮世の人か神の子か。
かたへにたてる若人の
汀につなぐ舟一葉
浮世の波に漕ぎいづる
名残は盡きず今更に
分ちかねたる袖の上

涙も露もしげくして。

「清き水面に塵もなき
君はみやまのいさゝ川、
碎け流れて世にいづる
われははかなき落瀧津、
同じひとつの水筋も
別れて遠し本と末。

「高峰の花に誘はれて
分け來し袖も薫りけむ、
紅埋む夕霞
緑糸よる玉柳

深山の奥に君を見れば
武陵の里もこゝなりき。

「八重だつ雲に世をへだて
過しし月日いかなりし
横雲わかるしのゝめに
さくは雲雀の春の歌
霞む川邊の夕暮に
訪ふは童の花の床。

「未來の空のたのしくて
ゑひしもはかな春の夢、
浮世の憂を吹送る

あらしの音に驚けば
ゆふべの雲はあとなくて
野にも山にも秋はきぬ。

「塵のむくろによしなくも
やどる思のなかりせば
今の嘆のあるべしや、
見しよの夢を呼び返す
みそらの風は吹絶て
恨はつくる時ふなき。

くづをるさまはあらぬども
哀れをこむるまなじりに

帶ぶるや露の玉かつら
かしらを垂れて乙女子はし、

「定まる道にすべもなく
深山に君をどいめ得じ、
定離のためし顧みて
心なしとな恨みぞよ。

「どこよの花のさきにほふ
神の御園を閉されて
かどにたゝずむ罪人に
風吹送る 天てんの樂
泣きてきゝけむいにしへの
ためしをあはれ思はずや。

「いさゝ小舟に棹さして
漕行く末も程遠き
君が船路の楫まくら、
寢覺の月の影さにて
風凄まじき夜なくは
思ひもいでよ我が里を。

「長き船路の盡きん時
あらしあらしのやまん時
波も霞の磯ちかく
散りくる花のふいきもて
繫く小舟のときま萱きて
またも逢見ん折をこそ。

さらばとばかり夕浪も
咽ぶ恨のせいらぎや
霧たちこむる谷川は
跡見返れどかひうなき
浮世の秋ももろとも
流れく 未遠く。

枯 柳

沈む夕日を見送りて
佇む岸のかれやなぎ、
消ぬすがたはつらくとも
しばしは忍べ程もなく

暗のころもに包ませむ、
下ゆく流水瘦せて
咽ぶも悲し秋の聲。

造化妙工

嗚呼うるはしき天地あめつちの
たくみをいかにたへまし、
月日めぐりて年行きて
かゆるいくそのけしきや。

春の歩みのつくところ
地に花薫り草いろひ、
春の呼吸いひきのゆくところ

空に蝶舞ひ鳥歌ふ。

清きは夏の夕河原

涼しき眺見よやとて

空に月照り風そよぎ

地に露結び水ながる。

しぐれも雲も時めきて

秋の夕の色よはた

谿は紅葉のあやにしき

巖は妻戀ふ牡鹿の音

冬はあしたのあけのいろ

雪の梢に梅薫り、
梅の梢に雪かゝる。

嗚呼いつくしき天地の

たくみをいかにたゝへまし

同じ一日の空合も

移るいくその眺めぢや。

天のはてより地のはてに

光と暗を布き替て

こゝに十二の晝の時

かれに十二の夜の時。

薄紫によこぐもの
たなびくひまを眺むれば
いろなる露を身にあびて
笑みつ生るゝ「あした」あり。
紅くれなるさむるかげろふの
光のおちを見渡せば
霞の袂ふりあげて
鳥呼び返す「夕」あり。
時雨の後は虹にほひ
虹の後は月にほひ
月はだ遠く落行けば
あなたに明けの星あかし。

嗚呼あほいなる天地の
たくみをいかにたふべき
しづく集り塵つもり
こるもいくその形象かたちや。
いゆき憚るしら雲を
麓なかばにとめおきて
落る日を呑み月を呑む
高きは山の姿かな。
春の霞も秋風も
共通路の沖遠み

潮 逆 捲 き 波 躍 る
廣 きは海のおもてかな。

黒 烟 高 くなびかせて

麓 の里の日を奪ひ

紅 蓮 焰 の波あけて

星 なき暗の空をやく

火 山 の姿 君 見 ず や。

千 年 つみこし白雪を

凍 ほれるまゝにさかおとし

八 百 重 の嶺を打越して

海 原 遠 くはこびゆく

氷 河 の流 君 見 ず や。

嗚 呼 かぐはしき天地の

た くみをいかにたゝへまし

ひ とつ の氣をもとゝして

染 むるいくその匂 ぞ や。

砂 漠 の月にほゆる獅子

秋 野 の露にむせふ蝶

か のたてがみもこのはぬも

ひ とつ いろとは誰か知る。

竹 の林にはしる虎

汀の蘆に眼る田鶴
この毛むろもかの皮も
同じたくみと誰か知る。
星地に落ちてそのあした
谷間のゆりの咲く見れば
露影消てそのゆふべ
岑上の雲の湧く見れば
おのが姿にあこがれし
花となりしもあるものを
清き乙女のむくろより
などか堇の咲かざらむ。

(註) 1) Narcissus. Ovid : Metamorphosis B. III

1) Ophelia. Shakespear : Hamlet. Act v. S. I.

静夜吟

夢 皆 深 し 萬 象 の
眠 も 夜 も 半 に て
神 秘 の 幕 は 垂 れ に け り
今 は 下 界 も 聖 か ら む。
東 の 空 を 昇 り 來 る
星 ま た 星 に 聲 も 無 し
西 の 空 行 き 沈 み 行 く
星 ま た 星 に 思 わ り。

消 ぬ て は 凝 ほ る 千 萬 の
露 の し づ く に 光 あ り
凝 り て は 消 ゆ る 千 萬 の
し づ く の 露 に 心 あ り。

時 に 微 風 の 一 そ よ ぎ
知 ら ず 過 ぎ 行 く た が 魂 か
時 に 流 る し 星 い く つ
知 ら ず 落 ち 來 る 何 の 魂。

あ し 静 か な る 夜 の 色
浮 世 の 夢 を さ め い で、
な が 永 却 の ふ と こ ろ に

憂 の 子 ら を 入 ら し め よ。

哀 樂

月 ほ の じ ろ う 森 黒 く
あ ら し 睡 れ る さ よ 中 に
下 界 離 る し 魂 二 つ、
ひ ど つ の 聲 は さ し や ぎ ぬ
「 樂 し か り け り 世 の 夢 は
ほ か な る 聲 は つ ぶ や ぎ ぬ
「 哀 し か り け り わ が 夢 は

鳴 呼 樂 み か 哀 み か
も し 年 足 ら ぬ 夢 の 世 の

差^け別^めは何のわざならむ、
仰げば星はまたしきぬ
月ほのじろう森黒く
あらし睡れるさよなかに
下界はなるゝ魂二つ。

星落秋風五丈原

祁山悲秋の風更けて
陣雲暗し五丈原
零露の文は繁くして
草枯れ馬は肥ゆれども
蜀軍の旗光無く
鼓角の音も今しづか。

亟 相 病 篤 加 り き。

清渭の流れ水やせて
むせぶ非情の秋の聲
夜は關山の風泣いて
暗に迷ふかかりがねは
令^{れい}風霜の威もすこく
守るとりての垣の外。

亟 相 病 あ つ か り き。
帳 中 眠 か す か に て

短檠光薄ければ
 こゝにも見ゆる秋の色
 銀甲堅くよろへども
 見よや侍衛の面かげに
 無限の愁溢るゝを。
 丞相病あつかりき。
 風塵遠し三尺の
 劔は光曇らぬど
 秋に傷めば松栢の
 色もれのづとうつろふを
 漢騎十萬今さららに

見るや故郷の夢いかに。
 丞相病あつかりき。
 夢寢に忘れぬ君王の
 いまはの御こと畏みて
 心を焦がし身をつくす
 白露のつとめ幾とせか
 今落葉の雨の音
 大樹ひとたび倒れなば
 漢室の運はたいかに。
 丞相病あつかりき。

四海の波瀾收まらで
民は苦み天は泣き
いつかは見なん太平の
心のどけき春の夢
群雄立てことくく
中原鹿を争ふも
たれか王者の師を學ぶ。
* * * * *
亟相病篤かりき。

伊周の跡は今いつこ、
道は衰へ文弊ぶれ
管仲去りて九百年
樂毅滅びて四百年
誰か王者の治を思ふ。
* * * * *
亟相病篤かりき。

(二)

嗚呼南陽の舊草廬
二十餘年のいにしへの
夢はたいかに安かりし
光を包み香をかくし

隴畝に民と交はれば
王佐の才に富める身も
たゞ一曲の梁歩吟。

閑雲野鶴空濶く
風に嘯ふく身はひとり
月を湖上に碎きては
ゆくゑ波間の舟ひと葉
ゆふべ暮鐘に誘はれて
訪ふは山寺の松の風。

江山さむるあけぼの
雪に驢を驅る道の上

寒梅瘦せて春早み
幽林蔭を穿つとき
伴は野鳥の暮の歌
紫雲たなびく洞の中
誰そや碁局の友の身は。

其隆中の別天地
空のあなたを眺むれば
大盜競ほひはびこりて
あらびて榮華さながらに
風の枯葉を掃ふごと
治亂興亡おもほへば
世は一局の碁なりけり。

其世を治め世を救ふ
經綸胸に溢ふるれど
榮利を俗に求めぬば
岡も臥龍の名を負ひつ、
亂れし世にも花は咲き
花また散りて春秋の
遷りはこゝに二十七。
高眠遂に永からず
信義四海に溢れたる
君が三たびの音づれを
背きはてめや知己の恩
羽扇綸巾風輕き
姿は替へで立ちいづる

草廬あしたのぬしやたれ。
古琴の友よさらばいざ、
曉さむる西窓の
殘月の影よさらばいざ、
白鶴歸れ嶺の松
蒼猿眠れ谷の橋
岡も替へよや臥龍の名、
草廬あしたはぬしもなし。
成算胸に藏まりて
乾坤こゝに一局棋
たゞ掌上に指すかごと、
三分の計はや成れば
見よ九天の雲は垂れ

蛟 四 海 の 水 は 皆 立 て
龍 飛 び ぬ 淵 の 外。

(三)

英 才 雲 と 群 が れ る
世 も 千 仞 の 鳳 高 く
翔 くる 雲 井 の 伴 や た そ
東 新 野 の 夏 の 草
南 瀘 水 の 秋 の 波
戎 馬 關 山 いく と せ か
風 塵 暗 き た い な か に
た て し い さ を の 數 い か に。

江 陵 去 り て 行 先 は
武 昌 夏 口 の 秋 の 陣
一 葉 輕 く 棹 さ し て
三 寸 の 舌 吳 に 説 け ば
見 よ 大 江 の 風 狂 ひ
焰 亂 れ て 姦 雄 の
雄 圖 碎 け ぬ 波 あ ら く。

劍 閣 天 に そ び 入 り て
あ ら し は 叫 び 雲 は 散 り
金 鼓 震 ひ て 十 萬 の
雄 師 は 圍 む 成 都 城
漢 中 尋 て 陷 り て

三分の基はや固し。
 定軍山の霧は晴れ
 沔陽の渡り月は澄み
 赤符再び世に出で、
 興るべかりし漢の運、
 天か股肱の命盡きて
 襄陽遂に守りなく
 玉泉山の夕まぐれ
 恨みは長し雲の色。
 中原北に眺むれば
 曩旒塵に汚されて
 炎精あはれ色も無し、

さらば漢家の一宗派
 わが君王をいたゞきて
 踏ませまつらむ九五の位、
 天の曆數こゝにつぐ
 時建安の二十六
 景星照りて錦江の
 流に泛ぶ花の影。
 花とこしへの春ならじ、
 夏の火峯の雲落ちて
 御林の陣を焚き掃ふ
 四十餘營のあといつこ、
 雲雨荒臺夢ならず

巫山のかたへ秋寒く
名も白帝の城のうち
龍駕駐るいつまでか。

その三峽の道遠き
永安宮の夜の雨
泣いて聞きけむ龍榻に
君がいまはのみことのり
忍べば遠きいにしへの
三顧の知遇またこゝに
重ねて篤き君の恩、
諸王に父と拜されし
思やいかに其宵の。

邊塞遠く雲分けて
瘴烟蠻雨ものすごき
不毛の郷に攻め入れば
暗し瀘水の夜半の月、
妙算世にも比なき
智仁を兼ねるほこさきに
南夷いくたび驚きて
君を祟めし「神なり」と。

南方すでに定りて
兵は精しく糧は足る、
(四)

君王の志うけつぎて
 姦を攘はん時は今、
 江漢常武いにしへの
 ためしを今にこゝに見る
 建興五年あけの空、
 日は暖かに大旗の
 龍蛇も動く春の雲、
 馬は嘶き人勇む
 三軍の師を随へて
 中原北に上りけり。
 六たび祁山の嶺の上
 風雲動き旗かへり

天地もよどむ漢の軍、
 徧師節度を誤れる
 街亭の敗何かある、
 鯨鯢吼いて波怒り
 あらし狂ふて草は伏す
 王師十萬秋高く
 武都陰平を平げて
 立てり渭南の岸の上。
 拒ぐはたそや敵の軍、
 かれ中原の一奇才
 韜畧深く密あがら
 君に向はんすべからなき、

納めも受けむ贈られし
素衣巾幗のあなどりも、
陣を堅うし手を束ね
魏軍守りて出ざりき。

鴻業果たし收むべき
その時天は貸さずして
出師なかばに君病みぬ、
三顧の遠きむかしより
夢寐も忘れぬ君の恩
答て盡すまごゝろを
示すか吐ける紅血は、
建興の十三秋なかば

亟相病篤かりき。

(五)

魏軍の營も音絶て
夜は静かなり五丈原、
たゞと思ふ今のまも
丹心國を忘られず、
病を扶け身を起し
臥帳掲げて立ちいづる
夜半の大空雲もなし。

刁斗聲無く露落ちて
旌旗は寒し風清し、

三軍ひとしく聲呑みて
 つゝししみ迎ふ大軍師、
 羽扇 綸巾 膚寒み
 おもわやつれし病める身を
 知るや非情の小夜あらし。
 諸壘あまねく經廻りて
 輪車静かにきしり行く、
 星斗は開く天の陣
 山河はつらぬ地の營所、
 つるぎは光り影冴て
 結ぶに似たり夜半の霜。

嗚呼陣頭にあらはれて
 敵どまた見ん時やいつ、
 祁山の嶺に長驅して
 心は勇む風の前、
 王師たゞちに北をさし
 馬に河洛に飲まさむと
 願ひしそれもあだなりや、
 胸裏百萬兵はあり
 帳下三千將足るも
 彼れはた時をいかにせむ。
 成敗遂に天の命
 事あらかじめ圖られず、
 舊都再び駕を迎へ

麟臺永く名を傳ふ
春玉樓の花の色
いさほし成りて南陽に
琴書をまたも友とせむ
望みは遂に空しきか。

君恩酬ふ身の一死
今更我を惜まぬど
行末いかに漢の運、
過ぎしを忍び後しのぶ
無限の思無限の情、
南成都の空いつこ
玉壘今は秋更けて

錦江の水痩せぬべく、
鐵馬あらしに嘶きて
劍關の雲睡ふるべく。

明主の知遇身に受けて
三顧の恩にゆくりなく
立ちも出でけむ舊草廬、
嗚呼鳳遂に衰へて
今に楚狂の歌もあれ
人生意氣に感じては
成否をたれかあげつらふ。
成否を誰れかあげつらふ

一死盡くし、身の誠、
 仰げば銀河影、
 無数の星斗光濃し、
 照すやいなや英雄の
 苦心孤忠の胸ひとつ
 其壯烈に感じては
 鬼神も哭かむ秋の風。

(六)

鬼神も哭かむ秋の風、
 行て渭水の岸の上
 夫の残柳の恨訪へ、
 劫初このかた絶えまなき

無限のあらし吹過ぎて
 野は一叢の露深く
 世は北邙の墓高く。

蘭は碎けぬ露のもど
 桂は折れぬ霜の前
 霞に包む花の色
 蜂蝶睡る草の蔭
 色もにほひも消去りて
 有情も同じ世々の秋。

群雄次第に凋落し
 雄圖は鴻の去るに似て

山河幾とせ秋の色
 榮華盛衰ことくく
 むなしき空に消行けば
 世よ一場いちぢやうの春の夢。
 撃たるものも撃つものも
 今更こゝに見かへれば
 共に夕の嶺の雲
 風に亂れて散るがごと、
 蠻觸二邦角の上
 蝸牛の譬おもほへば
 世々の姿はこれなりき。

金棺灰はいを葬りて
 魚水の契り君王も
 今いま泉臺の夜の客、
 中原北を眺むれば
 銅雀臺の春の月
 今は雲間のよその影、
 大江の南建業の
 花の盛りもいつまでか。
 五虎の將軍今いつこ、
 神機きほひし江南の
 かれも英才いまいつこ、
 北の渭水の岸守る
 仲達かれもいつまでか、

感極まりて氣も遙か
聞けば魏軍の夜半の陣
一曲遠し悲笛の聲。

更に碧りの空の上
静かにてらす星の色
かすけき光眺むれば
神秘は深し無象の世、
あはれ無限の大うみに
溶くるうたかた其はては
いかなる岸に泛ぶらむ、
千仞暗しわだつみの
底の白玉誰か得む

幽渺境さかひ 窮みなし
鬼神のあとを誰か見む。

嗚呼五丈原秋の夜半
あらしは叫び露は泣き
銀漢清く星高く
神秘の色につままれて
天地微かに光るとき
無量の思齋らして
無限の淵に立てる見よ、
功名いづれ夢のあと
消にざるものはたゞ誠、
心を盡し身を致し

成否を天に委ねては
 魂たましひ遠く離れゆく
 高き、尊たうとき、たぐひなき
 「非運」を君よ天に謝せ、
 青史の照らし見るところ
 管仲樂毅たそや彼れ、
 伊呂の伯仲、眺むれば
 「萬古の霄の一羽毛」
 千仞翔くる鳳の影、
 草廬にありて龍と臥し
 四海に出で、龍と飛ぶ
 千載の末今も尙
 名はかんばしき諸葛亮。

夕の磯

見よ夕日影波の上
 しばしたれたふ紅を、
 沈まば盡きんけふ一日
 名残はいかにをしむとも
 久しかるべき影ならず。

見よ老びどの磯の上
 思にしづむ面影を、
 逝かば終らむ身の一世
 ほだしはいかにつらくとも
 久しかるべき命めいならず。

嗚呼雲入りて星出でし
 夕日は波にしづみけり、
 わが日わが世のあとひとつ
 夕波騒ぎ風あれて
 嗚呼老びどの影いつこ。

暮 鐘

„La cloche ! écho du ciel placé près de la terre !
 Voix grondante qui parle a côté du tonnerre
 Fait pour la cite comme lui pour la mer !
 Vase plein de rumeur qui se vide dans l'air !”
 Hugo : Les Chants du Crepuscule.
 森のぬぐらに夕鳥を

麓の里に旅人を
 静けき墓になきがらを
 夢路の暗にあめつちを
 送りて響け暮の鐘。

春千山の花ふと
 秋落葉の雨の音
 誘ふて世々の夕まぐれ
 却風ともに鳴りやまず。

天の返響地の叫び
 恨の聲か慰めか
 過ぐるを傷む悲みか

人住むところ行くところ
 嘆と死とのあるところ
 歌と樂がとのあるところ
 涙、悲み、憂きなやみ
 笑、喜び、たのしみと
 互に移りゆくところ、
 都大路の花のかけ
 白雲深き鄙の里
 白波寄する荒磯邊、
 無心の穉子の耳にしも
 無聲の塚の床にしも
 等しく響く暮の鐘。

來るを招ぐ喜びか
 無常をさとすいましめか
 望を告ぐる法音か。
 友高樓のおばしまに
 別れの袂重きとき
 露荒涼の城あどに
 懐古の思しげきとき
 聖者静けき窓の戸に
 無象の天そらを思ふとき
 大空高く聲あげて
 今はと叫ぶ暮の鐘。

雲 飄揚の身はひとり
 五 城 樓 下 の 春 遠 く
 都 の 空 に さ す ら へ つ
 思 し の ぶ が 岡 の 上
 わ れ も 夕 の 鐘 を 聞 く。
 鐘 の 響 き に 夕 が らす
 入 日 名 残 の 影 薄 き
 あ な た の 森 に ゐ る が ごと
 む ら が り た ち て 淀 み な く
 そ いろ に 起 る わ が 思 ひ。
 静 ま り 返 る 大 予 ら の
 波 を ふ た へ び ゆ る が し て

雲 より 雲 に と よ み ゆ く
 餘 韻 か す か に 程 遠 く
 浮 世 の 耳 に 絶 ゆ る と も
 し る や 無 象 の 天 の 外
 下 界 の 夢 の う は ごと を
 名 残 の 鐘 に き へ と ら ん
 高 き 尊 き 靈 あ り と。
 天 使 の 群 を か き わ け て
 昇 り も 行 く か 「無 限」 の 座
 鐘 よ、 光 の 門 の 戸 に
 何 と か な れ の 叫 ぶ ら む、
 下 界 の 暗 は 厚 う し て

聖者の憂絶にずとか
 浮世の花は脆うして
 詩人の涙涸れずとか。
 長く、かすけく、また遠く
 今はたつとく一ひとき
 呼ぶか闇浮の魂の聲
 かの永劫の深みより、
 「われも浮世のあらし吹く
 波間にうきし一葉舟
 入江の春は遠くして
 舟路半ばに沈みぬ」と。

恨みなはてず世の運命、
 無限の未来後にひき
 無限の過去を前に見て
 我いまこゝに感あり
 はたいまこゝに望あり、
 笑、たのしみ、うきなやみ
 暗と光と織りなして
 歌ふ浮世の一ふしも
 いざ響かせむ暮の鐘、
 先だつ魂に、來ん魂に
 かくて思をかはしつゝ
 流一筋大川の
 泉と海とつながごと。

吹くや東の夕あらし
 寄するや西の雲の波
 かの中空に集りて
 しばしは共に言もなし
 ふたつ再び別るとき
 「秘密」と彼も叫ぶらむ。
 人生、理想、はた秘密
 詩人の夢よ、迷よと
 我笑ひしも幾たびか、
 まひるの光りかゝやきて
 望の星の消ゆるごと
 浮世の塵にまみれては

罪か濁世ガクセかわれ知らず。

其塵深き人の世の
 夕暮ごとに聲あげて
 無限永劫神の世を
 警しめ告ぐる鐘の音、
 源流すでに遠くして
 濁波を揚ぐる末の世に
 無言の教宣りつゝも
 有情シヤウの涙誘へるか。

祇園精舎の檐朽ちて
 葦酒の香のみ高くとも

セメント、ソヒヤの塔荒れて
 福音俗に媚ぶるども
 聞けや夕の鐘のうち
 靈鷲橄欖いにしへの
 高き、尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ
 わが駿鸞の夢さめて
 鳳樓いつか跡もなく
 花もにほひも夕月も
 うつろは脆き春の世や
 峯上の霞たちきりて

縫へる仙女の綾ぞろも
 袖にあらしはつらくとも
 「自然」の胸をゆるがして
 響く微妙の樂の聲
 その一音はこゝにあり。

天の莊嚴地の美麗
 花かんばしく星てりて
 「自然」のたぐみ替らねど
 わづらひ世々に絶えずして
 理想の夢の消ゆるまは
 たはずも響けとこしへに
 地籟天籟身に兼ねる

ゆふ入相の鐘の聲。

附 録

カーライル

近代緩漫の概念を以てせば詩人と豫言者とは大に異なり、然れども古昔某々國語に於ける稱號は二者同一にして共に Vates といふ、而して終始豫言者及び詩人の二種其意義頗る相類し、其根底に入れば二者猶同じ、特に至重の點に於て然り、共に天地の神秘に徹底せること即是、ゲーテは之を稱して公開秘密と曰ふ、人問ふて曰く孰れか大秘密なる答て曰く公開秘密なり、是萬人に開かるゝも殆んど一人の之を見るあるなし、萬有の神秘到る處にあり、フイヒテが所謂六合の聖意、現象の下に存するもの、一切の現象星辰より野草に至るまで皆其外裝なり、其有象の形現なり、人間及其造

作を以て特に然りとす、此神秘は萬世萬邦到る處にあり然かも人多くは之を觀過す、宇宙は上帝の思想の現化と稱すべきもの、而して人之を目するに凡庸微弱の物質を以てし、恰も諷刺家の所謂木匠所構の無生物を以てす、余今日之を談ずるも益なけん、然れども人若し之を知らず之に憑依せずんば頗る痛むべし、是至慘の事なり、然らば人間生存の價果して幾何ぞ、

他人或は此神秘を忘るゝあらん然れども、ワーズワース詩人若くは豫言者は善く是神秘を悟る、彼の世に下るは人をして之を明知せしめんが爲めなり、彼の使命常に此の如し、彼他に優りて親く此神秘に接して之を吾人に啓示せんとす、他人之を忘るゝも彼之を知る、之を知るは自己の任意ならず、其諾否如何を問はず必ず爾かあらざるを得ず、俗説傳聞復

茲に存せず、獨直觀あり、神仰あり、是人亦實に誠者たるを禁ずる能はず、他人は事物の外觀に憑るも彼は獨り其實相に憑る、是其天性自然の要なり、人は皆天地を玩弄視するも彼獨り誠實を以て之に對す、其ワーズワースたるは首として精誠の徳に因る、公開秘密を享受する詩人並に豫言者に到るまで全く相同じ、

次に二者の差を論ぜん、ワーズワース豫言者ハ夫の神秘を道德上に悟りて善惡と爲し義務禁止と爲す、ワーズワース詩人は之を美麗として獨乙人の所謂美學上に悟る、一は人の爲すべき所を顯し、他は人の愛すべき所を顯す、然れども此兩者錯綜して相分つ可らず、豫言者亦人の愛すべき所を見る、然らずんば彼何を以て人の爲すべき所を知らんや、古來世上に響ける至高の聲は何とか曰へる、曰く野の百合花を思へ、彼

勞せず紡かず而してソロモン榮華の極に當て尙其一花に及ばずと、是美の極奥を透觀せる言なり、嗚呼夫の百合花、野畦に生して其裝帝王に優り、美の大海に在りて外を眺むる美目の如し、其外見粗野なるも其神髓若し美ならずんば大地何を以て之を生ぜん、此の如き見解を以てせばゲーテの言象を疑はしめしもの其意なきに非ず、曰く美は善より高し、美は内に善を含むと、美の眞なるものは偽なるものと相去ると天地も甞ならず、豫言者詩人の異同上に述ぶるが如し、

人或は曰はん、然れども眞詩と眞文との區別は如何と、之に關して所論頗る多し、近來獨乙評家の如き特に然りとす、其言始めは頗る解し易からず、例せば曰く詩人は中に「無極」を有して其描寫する所に一種「無邊」の品性を宿らしむと、言精

しからずと雖とも旨題已に漠たるを思へば又記するに堪ゆ、能く考ふれば漸次内に意の存せるを見ん、我は乃ち以爲らく詩は節を踏む歌謠なるを以て内に音樂ありとの古言頗る味ふべしと人我に迫るに定義を以てせば首として之を擧げん、曰く若し其描寫正しく音樂的ならば詩なり、獨り言辭のみならず、精神容質思想文辭及び全體の意思悉く音樂的ならば詩なり、然らすんば詩に非ずと音樂の義極めて深し、物の深意を穿ち内に潜めて諧調を悟りて之を現はすもの即音樂的思想なり、内部の和合諧調は物の精神なり、物之に據りて成り、之に據て世に存する權あり、一切甚深の物は皆和調にして發すれば自ら歌謠となる、歌謠の意深し、誰か善く言辭を以て人心に及ぼす音樂の効果を述べんや、正に是沆瀣測るべからざる無言の辨、遙に吾人を「無極」の境邊

に導きて暫く之を凝視せしむるものなり、
 獨り是に止らず、尋常普通の言猶内に歌謠の分子あり、天下
 到る處の寺院必ず其寺院句調ありて音律若くは腔調、是に
 合して人其曰ふ所を歌ふ、語調の高低は唱歌の一種なり人
 皆獨り他人の語調を覺るも已亦特殊の語調を有す、而して
 激情の言は自ら音樂的となりて通常の語調に優るを見る
 べし、奮怒の言語尙歌謠となる、一切の幽深の物は皆歌なり、
 歌は人間の神隨中心にして他は恰も包皮殼に過ぎざる
 也、歌は人間の要素なり、人間萬物の要素なり、古希臘人は圓
 諧イハハモデーの譬を爲せり是其萬有の真相を觀ぜる所以の法なり、思
 らく萬有聲音の神髓は完美の音樂なりと、故に吾人は詩を
 呼んで音樂的思想と曰はん、而して思想の法此の如き者は
 即詩人なり、要するに其基は亦知なり、詩人を作るは精誠及

達觀なり、觀ること深からば即音樂的ならん、萬有の中心に
 達するを得ば音樂到る處に在らん、(英雄論)

セレイ

詩は人間知識の中心と周圍とを兼ね、一切の科學之に含有
 せられ、一切の科學之に憑依す、詩は他一切思想系統の根な
 り花なり、一切を生じ一切を飾るものなり、是物萎すれば果
 と種と生ずるを得ずして生命の樹其滋養を失ふ、詩は萬物
 の究意表現なり美華なり、草木にありては色なり香なり、人
 身にありては美貌なり紅頬なり、詩若し堆理計算を以て達
 す可らざる永却界より光と熱とを齎すこと無かりせば道
 徳戀愛、友誼、殉國果して何物や、然らば天地の光景果して
 如何や、墳墓の此邊に於ける吾人の慰籍は何や、墳墓の

那邊に於ける吾人の翹望は何ぞや、詩は推論と異にして人意を以て強て致すべきに非ず、人は我詩を作らんと曰ふを得ず、最大詩人も之を曰ふ能はず、人心の創作に於ける、猶炭火の衰へんとするが如し、俄爾として吹き來る風の如く無象の勢力只之を霎時炎々たらしむるのみ、此勢力は内より發すること色の花に於けるが如し、人心の意識は其來否を前言する能はず、此勢力若し其純と強とを終始持續するを得ば結果の偉大量る可らざらむ、然れども之を筆に寫さんとする時は神興已に衰ふ、故に天下最美の詩も究意詩人が元始懷想の殘光餘影に過ぎず、最佳の詩句果して努力勉勵に因るや否や余は之を今日の大詩人に問はんとす、評者が常に贊稱する所、所謂作者の勉勵巧遅とは果して何ぞや、要するに神興の來れる瞬間を善く觀

察すること及餘地に凡庸の辭句を埋むることの外に出づるに非ずや、後者は詩才に限定あるが爲め勢止むを得ざるに出づ、ミルトンは初め「失樂園」を全部懷想して後各部に遷り行けり、詩神忽然として我に歌を授くとは彼自ら語る所なり、伊太利の詩人アリオストロが名篇「オルランド」フエーリオソを「作れる時首行を五十六回改めたり」と説くもの須く之を思ふべし、彫刻繪畫も亦然り、名畫巨像が美術家の手に成るは兒の胎内に長ずるが如し、其手を動す心は自ら技術の原因進路方法如何を説明すること能はず、詩は最幸最善の瞬時に於ける最幸最善の人心を記録するもの也、人に關し處に關し、或は自己の心に關して、忽焉一種の思想感情起ることあり、其來るや前知す可らず、其去るや追及すべからず、然かも常に高潔にして喜ぶべきと言語に

絶す、是恰も人性中に神性の注入する也、優美の感情を有し
 廣大の想像力を有する人は此種の状態を経験せむ、之に因
 て起る精神の態度は一切卑野の願望と相闘ふ、道德戀愛殉
 國友誼等の熱情は重に此の如き感情と連結す、而して其持
 續する間、我は宇宙間の一微分子に過ぎざるを覺はむ、詩人
 は此の如き感情を有し、其瞬時の色彩を以て一切の物を染
 め、光景若くは人情を描寫するとき一言一句靈妙の琴線に
 觸れ、夫の感情を経験せるものの心中に過去の影像を再發
 せしむ、詩人は此の如くして宇宙間最美最善なるものを不
 滅ならしめ、人生の奥底に潜してやゝもすれば忽然消失せ
 んとする幻影を捕へ、之を言語に體現して人界に送る、詩は
 人界中に來る神聖分子を保存するもの也。(散文集)

ジヨージ、サン

詩人は社會の生を爲すに不幸なり、極めて不幸なり、彼は社
 會が己の好める如く改造せられんを欲せず、只社會が神の
 計畫の如くならんを欲す、詩人は善を愛し又美覺と稱する
 一種特殊の物を有す、此事物を見て之を悟り之を賞する官
 能の發達只外界の物體に關するときは彼只美術家のみ、其
 官能若し繪畫的意覺を超絶し、靈魂恰も肉體と等く眼目を
 有して理想界の深奥に到徹せば二様官能の聯合始めて詩
 人を作る、故に詩人たらんものは美術家と哲學者とを兼ね
 ざる可らず(旅人の書簡)

エマルソン

哲人は日常觸目の事物中に神秘の意を觀ずオルヒアス、エムベドクルス、ヘラクリタス、プラトウ、ブルターク、ダンテス、エーデン、ボルグ及彫刻、繪畫、詩歌の名工皆然り、人間は單に形骸に非ず、また神靈を内に有するものに非ずして直に靈の兒なり、靈より成れり。斯の如く時劫及び時劫の産物の本源は玄妙なり、美麗なり、之を思ふて吾人は夫の詩人即美の人の本性と本分とを究めんとす。

人の生けるや眞理に憑り、人の立つや述言を要す、憂に關し美術に關し日用百般の事物に關して人は其秘密を語らんとす、人身は人間の一半なり、他の一半は彼の述言是なり、然れども恰好の述言は極めて稀かり、萬有自然か吾人に與ふる印象は微且つ弱にして僅に覺官を刺戟するのみ内に貫通して之を述言に形現せしむる能はず。是を能くするもの

は詩人あり、他人の夢みるどころ彼之を見み之を捕へ、經驗の全領域を横行し其印象を言語に現じて一般人間を代表するもの即詩人なり。蓋し宇宙に三兒あり、吾人の思想系統異なるに隨ひ夫の三者に與ふる名稱亦互に異なり、即或は原因、運營、結果といひ、或は詩的にヂョブ、ブルトウ、ネプチエーン、といひ、或は神學的に父、聖靈、子といひ、吾人は今茲に知る者、行ふ者、言ふ者と曰ふ。一は眞を愛する者、二は善を愛する者、三は美を愛するもの、是三相等し、詩人は言者なり、名をつくる者なり、美を表するもの也、彼は一の帝王なり、蓋し宇宙は塗られしに非ず、飾られしに非ずして、元初より美に、神は美はしき某物を造れるに非ずして、美は宇宙の創造主たればあり。是を以て詩人は副主に非ず。諸侯に非ず、自己の權に於て帝王なり。俗人は只行爲活動を尙ひ、夫の爲さずして

言ふものあれば之を擯斥し、詩人は自然に言者にして述言の爲めに此土に遣はされし者なるを悟らざる也。ホーマーの言尊きは、猶アガメンノンの勝利尊きが如し。詩人は英雄を待たず聖人を待たず、後者が主として或は働き或は考ふると等く彼は主として述言し他事は首要なるも我に取りては牖屬に過ぎずとなす也。前人の未だ述べざるところを述ぶるは詩人の特徴なり信仰なり、彼は理想を見るもの也。必然及偶然を語るもの也。吾人は今所謂詩才あるもの韻脚に工なるものを曰ふに非ず、眞詩人を曰ふ、一言一句述ぶる所皆詩句をなすもの彼必ずしも詩人に非ず、宇宙は靈の躰現なり、生あるところ生必ず躰に現はる、科學は物質的なり日月星辰、物理、化學人は之を自存として説く故に淺薄ならざるを得ず、之を透觀するは詩人なり、彼俗説を離れて新思

想を解き來る、吾人が新思想に近づき得ざる只一步、しかも是懸崖千仞に等し、恰も牧羊人風雪に迷ひ自己の小舎を去る僅に數十歩内に倒死するに似たり、思想は囹圄なり、皇天は囹圄なり故に吾人は歌謠に於て、行爲に於て、或は容貌動作に於て新思想を齎し來る詩人を愛す、彼は吾人の囚鎖を解き吾人をして新光景に接するを得せしむ。是の解放は萬人に尊し、之をなす力は智力の測度也、此徳を有する各詩文は不滅也、世界の諸宗教は想像に富める少數人の叫喚より成る。嗚呼爾詩人、疑ふ勿れ、事我に在り、必ず現せざる可らずと曰へ、俗人の喧囂笑罵何かあらむ、顛沛流離何をか傷まむ、立て而して勉めよ、神秘の力必ず起らむ、歩むもの、匍ふもの、長ずるもの、存すもの、悉く順次に爾に現はれて其思想の躰現とならざるなけむ、事ここゝに到らば詩人の天才は無盡藏

なり、是を以てホーマー、テヨール、セーキスピア、ラファエ
 ルは其創作に制限なし、獨り命數の制限あるのみ、恰も街上
 を運べる明鏡の如し、萬般の像影悉く之に映ず。
 嗚呼詩人よ、新たなる爵位は深林牧場にあり、已に城壘にあ
 らず、また劔光に因らず、爾世界を捨て、獨り詩神を知るべ
 し、永く世の笑罵するところとなるべし、而して其報酬は如
 何、理想は爾に取りて實なるべく、實在界の印象雨の如く、爾
 の魂に下るべく、山河海陸悉く汝の有たるべし、雪の降ると
 ころ、水の流るゝところ、鳥の飛ぶところ、暮色の裏晝夜の相
 逢ふところ、蒼天雲を吐き星を撒くところ、形骸、透明の界を
 有するところ、天上に途の開くところ、危難、崇畏、及び愛の
 存するところ、茲に「美」ありて雨の如く、爾に灑がん、爾此土を
 歩むもまた一の賤劣不當なるものを見ざらむ、(論文集)

ユーゴー

「失樂園」を書せる詩人あり、「暗黒」を書せる詩人あり。
 樂園と暗黒との間に世界あり、太初と終極との間に人生あ
 り。元人と後人との間に人間種族あり。
 人の生けるや二様の狀に於てす、一は社會に據り一は自然
 に據る。神之に情を與へ、社會之に行爲を與へ、自然之に想を
 與ふ。

情、行爲に合して、即、現時の生、過去の史に合して、戯曲起り情
 想に合して、本義の詩則ち生ず。

其過去を寫すや、精細を盡して、科學に類するとき、其人生を
 描くや、委曲を極めて、解剖に類するとき、戯曲則ち小説とち
 る、小説は、時に思想に依り、時に心情に依りて、劇場の境域外

に戯曲を發達したるものに外ならざるなり。其餘、詩中或は戯曲あり、戯曲中或は詩あり。詩と戯曲との錯綜せる恰も人間の諸能力互に混ざる如く、天上の星辰互に光を交ゆるが如し。行爲時として想に入ることありマクベス曰はずや、群燕塔上に謠ふと。シドは曰はずや、微光暗影星より降ると。スカーパーンは曰はずや、今夕、天黒衣を纏ふと。地上の物一として夫の緑樹青天暗夜風聲鳥音に觸れざるなし。被造の物一として造化を脱する能はず。更に他方を顧みれば想中時に行爲あり。ガラス牧歌の沈痛なるは悲劇の第五段に似たり。エイチイドの第四卷亦一悲劇なり。ホラースの一歌謠はモリエルの一喜劇となれり。物り獨立ち獨り全し。而して物また匹し匹して而して、殖ゆ社會は自然中に默然たり、自然は社會を包圍せり。

詩人の兩眼一は人生に向ひ、一は自然に向ふ。前者を稱して觀察と曰ひ、後者を呼んで想像と曰ふ。常に此二物を觀ぜば天來の靈想詩人の腦裏に來る。一にして多、單にして複、人を天才と稱す。請ふ今より之を述べん、從來の作と將來の作とに於て著者は讀者と等く決して獨り己を思ふことなし、是素より曰ふを要せず。謙遜沈着なる美術家は肅然帽を脱し眼を開て、美術を説明すべき權利を有せんを要す。彼曖昧なるも不完なるも、純粹永劫なる光榮の現前に當りて人之が冥想を禁ずる能はず。冥想は美術家の生命なり、人間は呼吸し、美術家は翹望す而して何等の牧豎か、花に酔ひ星に眩し、清流潺湲として牛羊飲する處靜に其足を涵して、一生就ち一回、願くは帝王たらむと叫ばざらむや。

更に進で説かむ。偉大高尚の詩人親く日常政治界の混擾に處して今日不朽の大作を爲すものあり。然れども思ふに完美の詩人、或は偶然に或は故意に、少くも其要あるとき退隱の生を營まんもの、而して此際政治黨派の關係を離れて是が累とならざらんもの、彼亦一大作を爲すことを得む。係累なし、桎梏なし意思の自由なる猶行爲の自由なるが如し。勞者を惠むに當り、殘者を憎むに當り、忠誠を愛するに當り、艱難を憐むに當りて、等しく執着なし。何人の爲たるを問はず、何派の爲たるを論ぜず、虚妄の途を塞ぐに自由あるべし。利の誘ふところとなるも、道を守るに自由なるべし。一切の艱辛を眷顧するに自由なるべし。一切の敬信を尊ぶに自由なるべし。民を愛するも、王を惡まず、亡朝を弔するも、現代を傷はず、未來の帝王を賛するも、昔人を怒らず。自然の中に生

き、社會と俱に住み、天來の靈機に隨ひ、自ら考へ、人を考へしむるを欲し、感情胸に溢れ、平和意に満ち、時の宜きに隨ひ、好友として行て、原野に春を觀み、玉樓に王侯を觀、囹圄に刑人を觀んとす。彼もし人生規典の中、時に法を咎むるあらば、其日夜孜々として、永劫なる事物と共に、此神聖大憲を究めしを知れ。其深沈嚴肅の冥想に入るに當りて、一物の之が累をなすものなし、時事の擾々たるも、何かあらむ。彼之を化して自家の材料と爲す。偶然大哀の近くも、何かあらむ。思考の慣習、彼をして容易に慰藉を得せしむ。艱難ありて、衷心煩悶するも、何かあらむ。因厄禍害の裏、彼神の存するを見る。其哭するは即沈思する所以也。

其戯曲、及韻文と散文と、詩篇と小説との中に歴史を用ゐ、又創作を用ふ。或は民衆の生あり、個人の生あり、或は古代の悲劇

と等しく王家の罪惡を描く、中に深意の存するあり。或は近世の喜劇と等く民人の不徳を寫す、寫すは大に要あるなり。故意に格外の耻づべきものを蔽ひ、老者の常に大なるものを示して、老者崇敬の情を起さしめ、婦人の常に弱き者を示して、婦人愛憐の情を起さしめ、アダム、エブ以来人生の根基となれる慈父慈母の二大愛情中常に神聖の美德あるを示し、以て人性自然の愛情を崇拜せしめんとす。而して失望墮落其極に至る者、神尙ほ其胸中一點の光明を置て、天上の吸嘘常に之を活かしめ、冷灰決して之を隠さず、汚泥猶之を滅する能はず、之を靈魂といふ、彼この事を示して到處人間の品位を高めんと欲す。

其詩中現代に忠告の言あり、未來理想の幻影あり、又時世の反映或は燦爛或は慘悽なるものあり。廟廊、墳墓故蹟、追想あ

り、貧を惠むあり、慘を憐むあり、日月時令川原山海あり、人心靈臺を瞥見するあり、こゝに寺門を窺ふ如く聖壇上かの信仰希望詩及愛の諸寶の存するを見む、其詩中更に「我」を描くあり、此事恐らく哲人の行爲中最大普遍なるものなり。

詩、戯曲等一切の創作を貫きて渠は上帝造化の光榮を赫々たらしめんとす。沈思冥想して靈を天地に合する者皆此の如し。渠悲劇を語る、而して中に鳥音の階々を聞くべし、渠山水を描く、而して中に人間の困阨を見るべし。其外見を以てせば複雑多様なること其詩に優るはなし、其内實を以てせば多様にして又整齊あること其詩に優るはなし、總合を觀ずれば其著作は地球に似たり、萬種の産物あり、然れども萬種の思想中單獨の主意あり、萬種の花草あり、然れども萬種の根底中惟一の液汁あり。

良心を崇拜すること渠はヂューベナルの如かるべしヂュー
 ベナルは日夕自ら己の證人たるを感ず。思想を崇拜する
 ことダンテの如かるべし、ダンテは冥府の罪人を呼んで思
 想を失へる者とす。萬有自然を崇拜することアウガスチン
 の如かるべし。アウガスチンは萬有教徒と呼ばれんを恐れ
 ずして蒼天を有知と稱す。
 此の如くして其著作の全躰、其一切の戯曲、一切の詩、一切の
 思想を以て、此詩人、此哲學者、此靈魂の作るどころ、是實に神
 秘なる一大叙事詩なり。吾人皆各々中に其一節を有してミ
 ルトンこれが序を作りバイロンこれが跋を書す人間詩即
 是なり。
 是美術家の莊嚴なる生命なり。是哲學の職とする所なり。是
 好諧の主とする所なり。是詩と詩人との極致あり。一切の哲

人皆是を目的とし、功名とし、主義とし、終極とするの權あり、
 著者嘗て之を述べしこと一回に止らず。著者亦堅忍と良心
 と忠誠とを以て之を勉むるものあり。他何をか爲さむ、人の
 稱して其天來の靈想と爲すものを放離せず。常に人間に向
 ひ、自然に向ひ、神に向ふ。かれ一新作を出すごとに其思想を
 掩へる被覆の一偶を揚ぐ。而して精細の讀者は其集中一見
 すれば種々分岐の狀あるも自ら一種の統一あるを悟らむ。
 著者思らく、自己の心質より來る思想あり、永劫真理より來
 る思想あり。而して二者を外にして眞詩人なるもの現代思
 想の全局を保有せざる可らずと。
 今日世に出すところ、この詩集に關して彼特に曰ふ所なし。
 著者のこれに望むところは前述の如し、其實際の如何は讀
 者の清鑑よく之を知らむ、人また此集中他の三詩卷に於け

ると等き物の存するを見む。夫の三卷は直に本集に先ちて一は一千八百三十二年に(秋葉集)次は一千八百三十五年に(薄光の歌)次は一千八百三十七年に(心の聲)出で皆著者の思想の第二期に屬す。本集(光と暗)は之を繼ぐものなり。而して其眼界擴大し其蒼天色を増し其沈靜深さを増さむ。心の聲の首章に當りて著者自任の使命あり。本集中の某篇を見れば讀者は著者が使命に不忠ならざるを見るべし。

一片また一片信仰の滅ぶるを思ひ、風に震へる社會の下哲人二箇の聖柱を築く、老人の敬と小兒の愛と文體語法に關しては著者曰ふ所なし。彼思想中時には茫漠、朦朧を容すも文章上に之を容すは極めて稀なること從來の作を讀める者は皆知るべし。好詩人佛蘭士を代表せる北歐の大詩を知らざるに非るも彼は常に南歐精緻の文體を

愛すること切なり。彼は太陽を愛す。聖經は其愛讀の書なり、ワルヂルダンテは其二聖師なり。其幼時専ら想像に耽り勉學に精しかりしこと彼をして今日の精神あらしむ。彼は精密と詩歌との兩立せざるを見ず、數は科學に於けると等く美術中にあり、代數學は天文中にあり、而して天文は詩に接す。代數學は音樂中にあり、而して音樂は詩に接す。人間の靈は三個の鍵を以て一切を開く、數字、文字、音譜即是也。知る、考ふ、想ふ、一切の事こゝにあり(光と影序)

附

録終

明治三十二年四月四日印刷

明治三十二年四月七日發行

定價金廿五錢

版權
所有

著者 土井林吉

發行者 大橋新太郎

印刷者 島連太郎

印刷所 三光

東京日本橋區本町三丁目八番地

東京神田區美土代町二丁目一番地

東京神田區美土代町二丁目一番地

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

文學士 大町芳衛先生作

（第四版）

美文 黃菊 白菊

全壹冊總クロー
金文字入洋装本
正價 金廿五錢
郵税 六錢

次 目
照る日の光 ○ 鐵槌 ○ 月譜 ○ 波の花 ○ 清正の告別 ○ 佛濱の月夜 ○ 夢野の鹿 ○ 地藏
堂 ○ わが涙 ○ 畫ける美人 ○ 胡蝶 ○ 御嶽めぐり ○ 山の影 ○ いさゝ川 ○ 花ざくら ○
やつれし姿 ○ 猿塚 ○ 松杉問答 ○ 睨陽城 ○ 女の心 ○ 柳の糸 ○ 夕たみの言葉 ○ 國家の
盛衰 ○ をこめ子 ○ 涙の味 ○ 袖 ○ 今日限りの命 ○ 春の夕暮 ○ 死 ○ 寶車 ○ 淺間の
山のひさ夜 ○ 海嘯 ○ 春駒 ○ 雨奇録 ○ 今宵の情 ○ 小春日和 ○ 旗手 ○ 南朝の名花 ○
風流鴨

桂月先生の文は、蠻猫を動かすこと已に久し。悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫ぶが如く。句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔からしむ。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る。讀書家の燈下、この絶好可憐の冊子をかかればならず。

大和田建樹先生著

（第五版）

散文 雪 月 花

全壹冊總クロー
金文字入洋装美本
正價 金參拾五錢
郵税 六錢

其文は、清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は、優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす。此編收むる所、近作無慮二百篇、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは、此書を措きて他に又た何かある

●讀賣新聞評 自叙に曰く「此卷は心して撰び集めたるものにあらず、たゞ事にふれ、折にふれて、書きすぎびたるまゝなり。近頃世に出しては、勸むる人のあるに任せて、名を雪月花とつけつ、月花を詠し、雪霜を記するもの多きに因るのみ、是れ大和田氏、錦織の心腸を寫し出したる者、散文あり、韻文あり、學者一讀して此文字に淑せよ。」
●國民新聞評 謠曲に精通せるをもて、國文上の編著に富むをもて、多くの讀者を有する大和田氏の散文、韻文各九拾餘を蒐集せるもの、氏の長は守株の弊なき措辭の明麗流暢なるにあり、銘題の普通に新古に互れるにあり、韻文の諧和にして音律的あるにあり、此點に於ては、思想新警なる新体詩人もまた一等を輸せざるを得ず、要するに最も廣く國文に興味を有する讀者を歓迎すべき、永夜燈前の好伴侶。

文學士 鹽井雨江君
文學士 武嶋羽衣君
文學士 大町桂月君合作 (第九版)

美文花紅葉

全壹冊總クロース
金文字入洋装美本
正價 金 參拾錢
郵税 金 六錢

目次

折太刀 墓畔の秋夕 金明水 ゆく水 大風雨 日光山の奥 あだ形見
 秋の山ふみ 病院の竹馬の友 露分衣 荒寺 須磨の一夜 笛の音 春の夢
 ねれ燕 磯の笛竹 琵琶湖 葉だつ 鶉鳥 魂まつり たゆたう駒 戦死卒
 秋蟬 故郷の花 戀 立秋 野末の伏屋 秋の蟬 落葉 浪の栗 詩神
 春花秋葉は天の文、人間亦美文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武
 嶋羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騒ぐ。今其錦心繡腸、
 吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十編、集つて
 此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發
 せんとす。洵に花紅葉を一時に觀るの心地すべく、明治文壇の奇觀
 たること、言を俟たず。天下文を好むの士、一本を備へて讀誦に資
 せられんことを。

國民新聞評

鹽井雨江、武嶋羽衣、大町桂月三文學士の小品又は新體詩を輯録したるものにして、雨江子の遑勁なる、羽衣子の雅澹なる、桂月子の華瞻なる、まことに花紅葉を一時に見るの感なきに非ず、つれづれの好伴侶此上やある

文學士武嶋又次郎先生著 (帝國百科全書第拾壹編)

洋装 菊判 修辭學 全一冊 正價 拾五錢 郵税 六錢

武嶋羽衣君夙に詩文を以て名あり、是著ある洵に所以あるあり。書中記
 する所、詩歌散文に關する事項は細大漏さず、其種類組織より、條章
 辭句に至る迄、引例提喻周到を究む。加ふるに行文流麗、明珠盤走
 るが如し、苟も文學に志あるもの座右に一本を缺くべからざるなり。

大和田建樹先生著 (通俗文學全書第壹編)

洋装 菊判 修辭學 全一冊 正價 拾五錢 郵税 六錢

文章の美觀收めて本書にあり筆を把るものは京都の文豪紙に落ちたるは美文の眞粹何等の
 美觀ぞ思ふ風霜雷霆に驅り筆を剪彩紅花に色を極め文章の趣味感并に聽納者を感じしむるも
 文章の修辭の功豈又大なるものや巧みに言語を變化活用して備は妙境に達し以て人の心意に
 大の感を生ぜしむるものや巧みに言語を變化活用して備は妙境に達し以て人の心意に
 の修辭學にあらすや本書の修辭學にあらすや本書の修辭學にあらすや本書の修辭學にあらすや
 凡て是西情の如く文思泉の如く涌かむ平民的文學の福音は本書にあらすや何ぞ。

谷 信次君 編

(紙數二百七十餘頁)

洋裝
袖珍

月の光

全 壹冊
正價 金拾八錢
郵税 金四錢

月の光
はこ何

天文●地文●歴史●地理●文學●宗教●風俗●歌謠等の各方面より玲瓏中天に輝く所の月を觀察して之に對する邦人の思想●風習●故事●美文等を綜合し、而して此一巻寸珍の書に收め、加ふるに幾多の精畫を挿入して以て文字外の清趣を發揮するもの。月夜閑に此書を一讀せば清涼の氣自ら心胸を洗ひ來らん。

大和田建樹先生著

(通俗文學全書第二編)

洋裝
菊判

新體詩學

全 壹冊
正價 金拾五錢
郵税 六錢

歐米文學の空氣一たび壓入せしより新體詩の流行日に月に隆盛を極め雜誌に新聞に其作を見る事殆んど虚日なきが如し然も未だ嘗て之か作法を教へ之が方針を示したる書の出でざるは遺憾なり此に至てか先生の此著あり書中に説く處開題に起りて次に新體詩の沿革より、句格、段格、用語、意匠、裝詞、文法、違例等の數章を経て、書式、讀法、作例、新案に終る其文解し易く其趣向實に面白し苟も文學に志ある諸君士の興味と實益とを併せ得るは蓋し此書に在らん。

宮内省御
歌所寄 中邨秋香先生撰

(總クローリス金文字入美本)

新體詩歌自在

全 一冊
正價 金壹圓
洋裝上製 郵税 八錢

總 論

人事部 …… 百五十三題

天象部 …… 九十七題

動物部 …… 三十九題

地儀部 …… 四十五題

植物部 …… 四十九題

著者の歌文に深きは、既に江湖の熟知する所、而して新體詩に於て、特得の文藻と滿腹の意見とを有せらるゝは、その斯學を以て御歌所に奉仕せらるゝを以ても知るべし。本書は、我邦歌詞の起原沿革より、以て新體詩の發達に論及し、廣く類題を設けて、作例を示し、特に多くの新事物を題としたる如きは、他に其比を見ざる所、眞に書名に負かざる良典といふべし。

大和田建樹先生編

(美本紙數千七百頁)

三 版 作 文 寶 典

全壹冊洋裝總皮金文字入
目正價金三圓
方四百日

本書の價值は、作文の實習に便益なるに在り、作文の標準を明示するに在り、作文の模範を與ふるに在り、詠歌の作法を教ふるに在り、文學の趣味を解せしむるに在り。其文は通俗、其説は懇篤。龍頭加ふるに著者の文集、著者判定の歌合、著者翻譯の歐米詩林を始とし、文學上の參考となるべき諸種の事項を以てす。眞に文學者必讀の書、寶典の名、其實に背かざるなり。

大和田建樹先生編

(總クローズ洋裝金文字入)

袖珍 實 用 作 文 寶 典

全壹冊洋裝
正價金七拾五錢
郵稅六錢

江湖の大喝采を博したる、作文寶典の中より、其要を摘出し、更に新體詩作法等を増補して一小冊子と爲し、教室に旅行に、學生をして、携帶に便を得せしむるに在り。燈下爐邊に讀者をして索引に便を得せしむるに在り。……………(五版)

